ねこまんま

ピヨスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねこまんま

【Ｎコード】
Ｎ１４７４Ｆ

【作者名】
ピヨスケ

【あらすじ】
雨の日の公園で出会ったのは一匹の猫。それがこんな奇妙な出来事に繋がっていくなんて、これっぽっちも思わなかった。一人暮らしを始めた秀行と猫のラブコメ風味な物語。

第一話

「あっ！こらっ！」
今日の朝食であるアジの開きが目の前の女の子の口に放り込まれる。
まるで「勝った」と言わんばかりの目で俺を見つめ返す女の子。
「ったく、どうすんだよ？俺の貴重なメシを……」
「ボーっとするのが悪い。そんなご馳走を置いとかれて黙ってるヤツはいないぞ？」
「だからって……あぁ！もういいや。時間も時間だし。それよかお前も早く支度しろよ」
そう言って制服のネクタイを引っ掴んで女の子に促す。
自慢じゃないけど俺の通ってる高校は3ヶ月で3回遅刻すると丸坊主、という
前時代的な規則があったりして俺はこの前2回目の遅刻をしたばかりだ。
さすがに野球部でもないのに坊主頭というのもキツイ。
「ほら！早く！」
「ちょっと待て。まだこの「りぼん」というのが上手く……」
そう言って女の子は胸のあたりでもぞもぞと手を動かしていた。
「良いから！後で美由紀にでもやってもらえ！」
「あんまり急かすな、ヒデ。はげるぞ？この前「てれび」で言ってた」
「そんな要らん知識ばっかり覚えやがって……この馬鹿猫が」
そう吐き捨てると女の子はムッとした顔で睨んでくる。
その瞳は普通の人間の瞳じゃなかった。
「あたしは猫だけど馬鹿じゃない。馬鹿って言ったやつが馬鹿なんだ」

ー1年前ー

その日は6月らしい雨が降っていた。去年はほとんど雨らしい雨が降らなかったのに、
今年は去年の雨を持ち越したのかと疑う位の雨続きだった。
俺は一人暮らしの為のアパートを探してウロウロしながらぼやいていた。
「まったく……親父ももうちょっとマシな地図を寄越せってんだ。」
高校2年の6月。
仕事の都合で「また」海外に旅立った父親と、「浮気されるのが心配」という
アホな理由で「毎度の事ながら」一緒に旅立った母親。
今までは長くて2ヶ月程度の留守番だったが、今回は長くなるらしく1年くらいは
帰ってこないらしい。
あげくに俺に断られるとは思っていなかったらしく、研究仲間の一家に家を期限付きで
貸す事に決めていたらしい。
一緒に来いと説得されたけど、来年の受験、そして何より「外国」が嫌いな俺の強い
意志もあって日本に残る事になった俺は、晴れて一人暮らしを始める事になったワケだ。
「しかし……6年も住んでて、自分の町で迷う俺はアホなんだろうか？」
なんてウンザリしていた俺の後ろから元気の良い声が降ってきた。
「秀行？何やってんの？こんなトコで。」
突然自分の名前を呼ばれて振り返ると、そこにはクラスメイトの佐々木美由紀が
傘をさしながら立っていた。

「おう、美由紀か。いや、何でも……」
「何でも……って、同じところウロウロしてたけど、迷子にでもなったか？１７歳にして」
ぐっ……、痛いところを…。
「んな訳ないだろ？自分の住んでる町で。アホな事言うな」
「ふ～ん。じゃぁ、手に持ってる地図らしきメモ紙は？」

しっかりばれてました。

「あぁ！もう！そうだよ！そうですよ！！俺は自分の住んでる町で１７歳にして迷子になりましたよ！だからって何ですか？迷子になったら捕まるって法律でもあるんですか！？」
早口でワケのわからん逆ギレもあったもんである。しかも敬語。
「いや、いきなり逆切れされても……って、まさか本当に迷子になった？」
「……悪いかよ」
そう口を尖らす俺に向かって美由紀は目を半月状にすると次の瞬間、顔を真っ赤にして
「ぷっ……ぶはははは！秀行って馬鹿？迷子？ねぇ、アンタ馬鹿でしょ！？」
「馬鹿にすんなぁ！」
濡れる事も構わず、腹を抱えて笑う美由紀に怒鳴ると、俺は振り返ってアパート探しを
続けようとした。
「あー可笑しい……まぁまぁ、怒りなさんな。んで？何処行こうとしてたん？」
そういって美由紀は俺の手を覗き込む。
「あぁ。なんか親父の地図がわかりにくくてよ。「檜山ハイツ」ってとこらしいんだけど」

「檜山ハイツ？あぁ、それならアタシん家の近くだけど……良かったら案内しようか？」
こうして目的のアパートへと向かう事になり、学校の事や美由紀の部活の事を話していると
不意に美由紀が聞いてきた。
「ところでアパートに何の用事？知り合いでもいるの？」
「いや。これから一人暮らしすっから」
「マジで！？何で？アンタ二駅先の実家暮らしでしょ？」
驚く美由紀に、俺は一人暮らしに至る経緯をかいつまんで説明した。
「……ってなワケ。」
「へぇ～。お父さんと一緒にお母さんもかぁ。すごいねぇ。愛の力は」
「どこが？浮気されるのが心配って理由で海外まで行くんだぜ？英語もできやしねぇのに」
ぶすっとした顔で文句を言う俺の顔を見て美由紀はクスッと笑うと、
「良いじゃん。そういうのが愛なんだよ。お母さんは乙女なんだねぇ」
やけに嬉しそうに話す美由紀に脱力しながらも、歩いていると美由紀が突然立ち止まった。
「ここだよん」
どうやら無事にたどり着けたらしい。
見るとそこは白い壁の2階建て、特に目立った所も無い普通のアパートだった。
「おう、サンキュな。今度なんか奢るよ」
「んじゃぁ、何が良いか考えておくよ」
「あんまり高いもんじゃなきゃな」
「へーい」
そういってニカッと笑う美由紀に別れを告げ、部屋に向かおうとすると後ろから
美由紀が話しかけてきた。

「ねぇ、今度遊びに……来て良いかな？」
振り返ると少しだけ俯いた美由紀が、恥ずかしそうにチラチラと上目遣いで見てくる。
「あぁ。部屋の片付けとか必要な物の買出しとかあるから……すぐにってワケには
行かないけど、落ち着いたら遊びに来いよ」
言ってから、ふと「男の一人暮らし部屋に女の子が来る」という図を想い浮かべたが、
相手が美由紀なので特に気にもせず俺は続けた。
「とりあえず初めての一人暮らしだからな。気兼ねなく人を呼べるのも特権の一つだろ」
「ほんとに？んじゃぁ、落ち着いたら教えて？遊びに来るから！そんじゃ！」
やけに嬉しそうに走って帰る美由紀を見送り、俺はとりあえず部屋番号を
確認して鍵を差込み部屋に入る。

「今日から一人暮らしか……。２０４号室さん、よろしくな」

第二話

「っと……。まぁ、こんなもんかな？」
そんなに多くない引越しの荷物を片付けながら最後の段ボールを畳み終える。
もともとの性格なのか、両親のみやげ物に悩まされていた為か分からないが、
俺は部屋にあまり物を置きたくないタイプだった。
部屋にはテレビとコンポ、そしてベッドの3点だけ。
実家にいた時は母親がしょっちゅう「ひでく～ん……この前のお土産は飾らないのぅ……？」
なんてウルウルした目で問いかけてきていたが、あんな「骨」や「仮面」を飾ろうなんて
趣味は俺には無い。
「さてと。あとは生活用品か……」
そう、いくら物を置きたくないといってもこれからは一人での生活。
いろいろ入用になってくるのだ。
炊事・洗濯などの家事に必要なものを簡単にリストアップする。
「結構あるな……」
ふと外を見るとさっきまでの雨はどこへやら。窓の外には青空が広がっていた。
「えーっと、後は手で持って帰れるやつだな」
とりあえず外に出てから、近くに見つけたホームセンターで炊飯器やら洗濯機を
買った俺は配達を頼み、その近くにあったスーパーで今日の夕食を探すことにした。
ただ、今日は迷子になったり、片付けをしたりだったので自炊をする気も起きない。
出来合いの惣菜を買い、その他に歯ブラシやら洗剤もろもろを籠に

入れていく。
「やっぱり結構な量になるもんだな。流石に一人暮らしを舐めてかかったか……？」
ウンザリしながらも何とか今度は迷子にならない様に、歩いてきた道を戻る。
外に出ると日は落ちていて、肌に湿気交じりの空気がまとわり付いてくる。

「……？」

ちょうどアパートまで半分くらいの距離が残っているだろうか？
ふと変な胸騒ぎというか、何か引っかかる感じがした。
それが何を意味していたのか、上手く言い表せられない気分の俺はふと周りを見渡す。
辺りはすでに暗くなっており、虫を寄り付かせた街灯がジジッと音を立てていただけだった。
「気のせいか……？」
そう思い、また歩き出そうとした俺は進むべき道の向こうに何やらうっすらと白い光が
見える事に気付いた。
「なんだ、ありゃ？……まさか……いや時期的には分かるけど……」
一瞬、その光が世間一般で言う「人ではないもの」かと考えた。
ただ、昔から「人の骨」やら「生贄の儀式に使う道具」やらを手に取らされ、
土産の由来を長々と聞かされていた（もちろん両親に）俺は「そーゆー類のもの」に
あまり恐怖を感じる事はなくなっていた。
「とりあえず進まなきゃ帰れないしな……行くか」
そう決めて進もうと一歩踏み出すと、光は消えてしまった。
「疲れてたんかな、俺」

消えた光はどうやら俺の見間違いだった様だ。
そのまま歩いていくと、ちょうど光っていた位の場所に差し掛かる。
そこには来る時にも見かけた普通の公園があった。
そんなに広くない児童公園、取り立てて特徴があるわけじゃない普通の公園だ。
……いや一つだけ違う所を挙げるとしたら、一本だけ満開の花を咲かせる桜の木だった。
それは絵葉書から飛び出してきたんじゃないかと思えるくらいの見事な桜だった。
その見事な花を纏った桜に見惚れていた俺だったが、ある事に気づく。

（……いや。ちょっと待てよ？今は6月だぞ！？）

そう、その桜は6月の梅雨時期にも関わらず、満開の花を散らしていたのだった。
俺の住んでる所は日本列島の真ん中あたりだ。もっと北の方だったら分からないが、
この時期に花を咲かせている桜なんかお目にかかった事が無い。
（それに……結局あの白い光はなんだったんだ？）
さっき見た光を思い出した俺は、不思議に思い公園の中に入っていく。
夜も遅くなり誰もいない公園は、ひどく寂しく閑散としていた。
「しっかし、この桜は何なんだ？時期はずれだろ。もうすぐ本格的に夏だってのに」
俺は誰が聞くことも無い独り言を呟いて、桜の木の下へ向かう。
（でも最近は異常気象も多いしなぁ……そのせいだってのか？）
そんな事をふと思っていると、俺の鼓膜を微かに震わせる音が聞こえた。

「……にー」

気のせいじゃない。
その声は確かに桜の木の裏から聞こえてきた。
俺は木の後ろに回り声の主を確認する。
「猫……？」
そこには生まれてそんなに経ってないだろう、小さな猫がその身を震わせていた。
野良なのか首輪は付いておらず、毛は茶色く汚れている。
「野良か……。それとも捨てられたのか……？」
しかし、こんな小さい猫を捨てるとは。
飼えないなら最初から飼わなければ良いのに、人間ってのは
どうして自分の興味だけで他の生き物を自分の物にしたがるのか。
まだ、捨てられた飼い猫と決まった訳でもないのに、そんな事を考える俺。
「おい、お前野良か？それとも捨てられたんか？」
理解出来るはずも無いだろうが、問いかける俺に興味を持ったのか、猫は小さい声で
「うにゃ」と答える。
「おう。俺の言ってる事がわかんのか？お前なかなか頭いいんだな」
勝手に決め付けて会話を始める俺は、なかなかに頭が悪そうだが。
何にしてもこのままじゃ良くて病気。悪くて近所の野良犬の餌だろう。
いっそ俺が飼えば良いのだが、生憎その場の雰囲気で家族を増やせる程の甲斐性は無かった。
「おい、とりあえず今晩は俺んとこに来るか？でも飼ってやることは出来ないぞ？
何とか飼えそうな奴を探しみるけど」
俺はそう猫に問いかけると、猫は少し間を置き今までで一番大きい声で「うにゃ！」と

擦り寄ってきた。
「おし。そんじゃとりあえず帰るか」
気が付けばあれだけ降っていた雨もやんで、夜空を流れる雲の隙間から月がうっすらと猫を
照らしていた。とりあえず猫を抱き上げ公園を出る。
そのままアパートに帰り荷物をリビングに置いた後、風呂場のシャワーを出し
服を脱いで猫と一緒にシャワーを浴びる。
「とりあえず綺麗にするか……。よっしゃ、こっちゃこい」
猫に軽くお湯をかけ、ボディソープで洗ってやる。
猫に人間のボディソープはありなのか？とかアホな事をかんがえつつ洗い上げると、
そこには、さっきとはまったく別の色をした猫がいた。
「お前ホントは真っ白だったんだなぁ。別人……いやこの場合は別猫か……」
さっきまでは茶色の毛だったと思ったのは、全て汚れだったらしい。
真っ白な毛並みはバスルームの光のせいか薄い銀色にも見える。
最後にタオルで拭き上げてやると猫は満足そうに、「うにぁ」といって青い瞳を
パチパチさせる。
「俺も洗ったら出るから。お前は部屋で好きにしてな」
そういって俺は猫の背中をポンポンと叩いた。
猫はテテテッと脱衣所を抜けて、リビングの方へ歩いていく。
「しかし綺麗な毛の色だったな……、いやいや、それよりもアイツを飼ってくれそう
なのを探さないと……。まぁ明日にでも学校で聞いてみるか……」

第三話

一通り体を洗い、浴室の扉を開ける。
するとそこにはリビングに行ったはずの猫が、脱衣所にちょこんと座っていた。
なんだか寂しそうに。
「おいおい、風呂に入ってただけなのに心配になったのか？
大丈夫だよ、とりあえず飼い主候補が出来るまでは置いてやるから」
そう言うと理解したのか、猫は嬉しそうに、にゃ、と鳴いた。
ふむ。なかなか賢いし、愛想もある。俺は何だかこの猫が妙に可愛く感じていたが、
情にほだされそうになっている自分に対して、ブンブンと首を振る。
「だーかーらー可愛いだけじゃ駄目なんだって。ちゃんと世話してくれる奴を探すんだって」
そう独り言をつぶやく俺の足下に、猫がまとわりついてくる。
「っと、そういえばこいつに何も食わせてやってないな。
確かさっき、牛乳も買ってきたよな……。キャットフードはあるわけ無いが、まぁ、
ツナ缶も買ったし米もあるし……なんとかなるだろ」
そういって適当な皿に牛乳を注ぎ、レンジで少しだけ温めてから猫の目の前に差し出すと、
猫は嬉しそうにピチャピチャと飲みだす。
よし、とりあえず米が炊けるまで牛乳で我慢してもらおう。俺は早速、米を研いで
炊飯器にセットする。
その間に長ネギと豆腐の味噌汁を作り、さっき買ってきた惣菜をテーブルに並べる。
しばらくして炊飯器のランプが光り、炊けた事を確認すると、ご飯とツナ缶を少し深い

皿に盛り、味噌汁を掛けてやる。
「わりぃな。猫の食事というと、これしか思いつかなかった。我慢してくれ」
猫の前に皿を置くと、猫は匂いを少し嗅いでから、なかなかの勢いで食べ始めた。
「どうだ？旨いか？……って、まぁ食えれば何でも良いか」
猫に問いかけると、さっきまでちゃんと返事をしてたのに、今回は一心不乱に
がっついている。
「現金なやつだな、お前……。まぁ腹も空くよな、あんな所で一人ぼっちだったんだもんな」
と、自分も何も食べていない事を思い出し、一人と一匹の夕飯タイムに突入。
「ふむ、出来合いって馬鹿にしてたけど、最近の惣菜は旨いもんだな」
今気付いたが、猫とは言え何かがいると独り言が多くなるのかもしれない。
自分一人の食事に馴れていたとはいえ、久しぶりの孤独じゃない食卓に少し満足していた。
「さてと……メシも食ったし、今日は早めに寝るか。なんだかんだで、今日は疲れたしな。
お前も疲れたろ？」
そう言って猫にタオルをかけてやり、テーブルを片付けて寝室のベットへと入る。
すると閉めたドアをカリカリと引っ掻く音が聞こえる。案の定、開けてみると
猫の仕業だった。
「あーもう。今日越してきたばっかりなんだからやめろよ。汚して怒られんの俺なんだぞ？」
少しきつめの声で猫に言うと、ふにぃ～、と悲しそうな声を出し、

今度は俺の足元を
グルグルと回り始めた。
確かに、捨てられた後に拾ってくれた奴がドア越しとはいえ、消えちまった事は
コイツにとって悲しい事だったのかも知れない。
また飼い主がどっかに行ってしまうとでも思ったのだろうか？
俺は猫を抱え上げ、その青い瞳を見つめながら、
「大丈夫だってば。……とは言ってもなぁ……よし、今日は一緒に寝るか？」
俺がそう尋ねると、猫は「待ってました！」と言わんばかりの笑顔でうにゃぁ、と答える。
その返事に苦笑し、俺は猫と一緒に布団にもぐりこむ。
明日は月曜。学校は変わっていないとはいえ、何故か新鮮な気持ちで起きれるだろうと
ワケのわからん事を考えつつ、電気を消した。
俺の耳元で「……うにゃ」という鳴き声が聞こえた気がしたが、睡魔の方が勝っていたらしい。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

カーテンの間から微かに白い光が差し込んでくる。
どうやら、昨日の天気とはまるっきり逆らしい。
俺の頭は昨日の早寝のせいか、ずいぶんハッキリしていた。
「起きるか……」
とりあえず顔を洗おうと体を起こす。
すると布団の中で、何かがモゾモゾと動いているのが感じられた。
「……あぁ、昨日はアイツと寝たんだっけかな。……っと、潰れたりしてねぇだろうな？」
布団をめくり、確認しようとして。

……そこには猫じゃなくて女の子がいて。
……ずいぶん幸せそうな顔で。
……。

何で？

「のうわっ！」
朝っぱらから奇声をあげ、その女の子に布団をかぶせる。
当たり前だ。何が悲しくて、猫を確認しようとしたのに、あんな幸せそうな顔で
寝ている女の子を見つけなきゃいかんのだ。
一瞬見た女の子は、銀色の髪の毛で、猫みたいに体を丸くしてて。

……服も何も着てない状態で。

「幻覚見たか……？」
そうだ。
きっと朝だからそうなんだ。寝ぼけてるんだ、俺は。
スッキリ起きたのは気のせいで、まだ俺は寝ぼけてるんだ。
俺は自分に言い聞かせて、何とか心を落ち着かせ、もう一度布団をめくる。
それはもう、恐る恐るといった感じで。
するとそこには丸くなって寝ている白だか銀だかの毛をした……猫がいた。
「……あっぶねー！あっぶねー！俺！」
本日の独り言は、隣の住人からすると十分に危ない匂いを発していただろう。
とにもかくにも痛いヒトの仲間入りはせずに済んだ様だ。
「ったく。気のせいかよ……」

俺はまだ寝ている猫に、軽く蹴りをいれる。
すると猫は安眠を邪魔された事に腹を立てたのか、ふぎゃぁっと鳴いてこちらを睨んでくる。
もちろん、朝から危ない幻覚と間違えるキッカケを作った猫を、負けじと睨み返してやったが。

「ほれ。朝飯だぞー」
学校に行く準備も終わり、朝飯を食べようと猫を誘う。
すると、さっきまで不機嫌だった猫も食欲には勝てなかったのか、テトテトと皿に
向かってくる。
「今日は学校に行くからな。もしお前を飼ってくれるって奴がいたら、貰ってくれる様に
頼んでくるから。」
俺がそう猫に言い聞かせると、寂しいのか何なのか、にぁ、とこちらを見つめてくる。
……確かにこちらも一晩過ごして情が移ったのか、少し寂しさがあるんだが。

「っと、じゃぁ行ってくるからな。良い子にして待ってるんだぞ」
玄関の革靴を履き、カバンを背負って猫を振り返る。
猫はまだ寂しそうに見ていたが、ここは我慢させるしかない。
「そんな顔すんなって。二度と会えなく訳じゃなし。たまには顔見に行ってやるから」
俺は猫の頭を軽く撫でてやる。
そして、腕に巻いた時計を確認すると、もう家を出なきゃいけない時間が迫っている事に
気づく。
「うわっ、こんな時間だ。んじゃぁ、行ってくるわ……」
声をかけてから、言葉につまる。

そういえば「猫」と言って名前を決めていなかった事に気づいた。
そうか。飼い主探しが難航した場合は、しばらく一緒に暮らす事になるのか……。
そう思った俺は、名前を考える事にした。
「……名前か……そうだな……」
ふと閃いて、俺は猫に名前を告げる。

「ルナ……ルナってのはどうだ？」
俺は、こいつを拾った時に見えた月の光を思い出し、泥だらけだったこいつが
光に照らされた時だけは、やけに綺麗だったのを思い出した。
猫は名前を気に入ったのか、うにぃ、と鳴いて足元に摺り寄ってくる。
「おいおい、じゃれるのは良いけど俺は学校行ってくるから。んじゃぁまたな、ルナ」
まだニャーニャー鳴いてるルナの声を背中に感じつつ、俺は学校へと向かう為
アパートの鍵をかけた。
さてさて、学校で飼い主が見つかるかどうか……。

第四話

新居から学校までは歩いて15分程。
ものすごく近いかと言われれば微妙な距離だけれども、通学時間は大分
短くなった。この点については両親に感謝せねば。
ともあれ、引っ越し後の通学一日目な俺はいつもと違う通学路の風景を眺めながら
歩いていた。周りには同じ制服を着た生徒も結構いたりする。
そんな中、昨日の公園の前を通った時に俺は違和感を感じ、桜の木に目を向けた。
「あれ？花が……」
そう、昨日季節外れの花びら満開だった桜の木には、一枚の花びらも咲いていなかったのだ。
木の下に落ちてもいない。
「……？」
どう考えてもおかしい。あれだけの花が一日で無くなる事も、落ちていない事も。
頭の中にクエスチョンマークを浮かべた俺だったが、自分が学校に向かっている事を
思い出し、慌てて時計を確認。ダッシュしたのは言うまでも無い。

※※

「どうだい？一人暮らしの感想は。早速女の子でも連れ込んだかね？」
「朝から訳分からん事をぬかすな。お前じゃあるまいし」
朝っぱらからうっとうしい話題を提供してきた、後ろの席に座る裕

也の頭を軽く叩き、俺は席に着く。
悪友なんだか親友なんだか良く分からなくなって来たぞ。こいつは。
部屋を借りる、という話をした時に「一時間５００円でどうだろう？」と真顔で聞いてきた時には
本気で友達をやめようとも思ったが。女好きなこいつが俺の部屋を借りて何をするかなんて
馬鹿でも分かるわ。
なまじ、顔が良くて女に（のみ）優しいもんだから周りは騙されるんだよなあ。
この前も取っ替え引っ替えなのを見かねて、「いつか刺されるぞ？」なんて言ったら
「大丈夫、女の子とはきちんと合意の上で別れてるからね。変に自然消滅を狙ったり
するからこじれるんだよ？」と言い返してきやがった。うん、なんかむかついてきたぞ。
殴っちゃおうかな。
「ねえ、秀行君？なんか、カラスに荒らされたゴミを見る様な視線になってるよ？
俺、なんかしたかな？」
「心配するな。少しばかり、汚いゴミを蹴り飛ばしたくなっただけだ」
「いや、ちょっとは隠そうよ！そういう気持ちは！」
「やっぱ良いや、殴らせろ」
「うわあ、なにがなんだか全くわからないよ？」
こういう女の敵は男の敵でもあるのだ。早めに矯正しておいた方が世の中の為になるはず。
「朝っぱらから元気ね、あんた達は」
「うっす」
「おはよう美由紀ちゃん。今日も変わらない笑顔が素敵だよ？」
「おはよう、坂口君。あんまり馬鹿な事言ってると縫うわよ？」

「良い提案だ、美由紀。なるべく強い糸で頼む」
「ねえ、もう人間として扱ってもらえないのかな？一応、友達だったはずなんだけど」
涙目になる裕也だが、気にしないでおこう。
「どう？今日はちゃんと起きれたの？」
「いやー、それがな。今朝はちとショッキングな出来事があってな。バッチリ起きれた」
「なによ、ショッキングな事って？」
「あのな……」
口を開いて俺は気づく。
拾った猫と一緒に寝てて、目が覚めて布団めくったら女の子がいた幻覚を見ました、
なんて言おうものなら、まず間違いなく明日からクラスでいじめられる。
良くて無視。最悪、明日来たら机がありませんでした、なんてオチが待っているはず。
「いや、これがな。あれだ、その、うん、なんだ」
「どうしたのよ？全く意味が分からないんだけど？」
「そう！今日も可愛いな、美由紀！相変わらずモテモテか！？」
「この状況で言われると、馬鹿にされてるとしか思えないわね……坂口君、裁縫箱」
「待て待て待て。待ってくれ、謝るから」
冗談に聞こえない声色の美由紀を制し、どこから出したのか針と糸を持ち出した
裕也に蹴りを入れる。
「なんで蹴られてるのかな？僕」
「友人を売る様な奴にはこの位の制裁が必要だろ？」
「……さっき「なるべく強い糸で頼む」って言ってた気が……」
「気のせいだ」
裕也をシャットアウトし、ご立腹の美由紀をどうしようか悩んでい

ると先生が入って来る。
「み、みなさーん。席についてくださーい」
おろ？今日は未来ちゃんか。珍しい事もあるもんだ。
周りも不思議に思ったのだろう。男子の一人が手を挙げて質問する。
「未来ちゃーん、谷本先生はー？」
「あうう……「未来ちゃん」はやめてくださいって言ったのに……
ちゃ、ちゃんと
君塚先生って呼んでくださいって言ってるのに……ちなみに谷本先生は無断欠勤なのです。
ま、まったく教師なのに無断でお休みするなんて、教育というものを少し馬鹿に
してるんじゃないのかと思うのです……」
うむ。正論のはずなのに何だろう？この気持ちは。
涙目になり、どもりながら喋る身長１４２センチの教師に言われると、何かが間違っている様に
聞こえてしまう。
副担任である未来ちゃんの名前は「君塚未来（きみつかみく）」というのだが
その外見と話し方のせいで一度も「君塚先生」と呼ばれた事がない、と
これまた涙目でぼやいてるのを聞いた事があると、裕也が話してくれた事がある。
しかも皆が未来ちゃん、未来ちゃんと呼ぶのに、谷本先生の場合は
「谷本先生」と
呼ぶもんだから、ますます自信を無くしているらしい。
「でも谷本先生、どうしたのかな？病気？事故？」
「未来ちゃん、連絡はつかないの？」
「携帯には連絡したー？」
「あ、あうう。質問は手を挙げて一人ずつ……」
「身長伸びたー？」
「彼氏に振られたって聞いたけど？」

「き、昨日の話なのに、なんで皆さん知ってるんですか……！？」
クラス中に質問され、処理能力が追いつかなくなった未来ちゃんだが、
後半のどうなのかと思う質問にも、馬鹿正直に答えている。
そして我がクラスのホームルームは、いつの間にか「未来ちゃんはどうやったら
もっとセクシーになれるか？」という議題の会議になっていくのであった。

第五話

朝から訳の分からんホームルームになった以外は特に変わった事も無く、
俺は帰り道を歩いていた。帰り際「遊びに行ってもいい？今日は加奈ちゃんと
遊ぶ予定があってさ！」なんて言ってきた裕也を椅子にくくりつけてきたが。
引っ越し二日目で俺の部屋をいかがわしい事に使おうとしやがって。
そんな俺は昨日寄ったホームセンターに足を向ける。
家で腹を空かしているだろう猫に食事の一つでも買って行かねば。
とは言ってもキャットフードなんぞ買った事のない俺は、とりあえずペットフード
コーナーに向かい適当にカゴに入れる。普通のキャットフードと、
高級そうな缶詰を
買って家路を急ぐ。
「なんでだろうな……自然に急ぎ足になっちまう」
一人そう呟いた俺は自宅に着き、鍵をあける。
「ただいまー、ルナー、良い子にしてたかー」
玄関先から奥の部屋へと声をかけるが反応は無し。むう、世話になっておいて
出迎えの一つもできんのか、あの猫は。一応メスなんだし、三つ指ついて、とは言わんが
愛想良く出迎えてくれても良いだろうに。
「おーい、寝てんのかー……っと」
部屋に入り確認するが、そこにルナの姿は無い。寝室も見てみたが気配は無し。
「あんにゃろう……どこ行ったんだ……」
不安に加え、もしかしたらどこかに行ってしまったんだろうな、と

いう寂しさで
一人立ち尽くす。
「はは……思ったより気になってやがんの、俺」
一晩だけとは言え、寝食を共にしたのに。書き置きの一つでもしてけってんだ。
なんて、猫だから無理に決まってるか。心配は心配だけど、あいつだって考えが
あって出て行ったんだろう、俺が寂しいからって連れ戻す訳にもいかない。
第一、どこに行ったかさえ分からないのにな。
その時俺は、ベランダの方に何か置かれているのに気がつく。
「なんだ、こりゃ……」

そこにはフナが一匹、恨めしそうな目で俺の方を見ていた。

「あいつ……一宿一飯の恩義でござい……てか？」
もちろん誰が置いたのかも分からないし、あいつが置いてったなんて事も分からない。
それでも俺はあいつだと信じていた。
というか、気持ちは嬉しいが俺はフナ料理なんて知らんぞ。
それにどこで穫ってきて、どのくらい時間が経っているのか分からない魚を
食べる勇気はさすがに無いわ。
「という訳でこれは返しとくか」
そう呟いて、俺は昨日の公園に向かう為、制服のまま先ほど帰ってきた道を歩く。
ほどなくして公園に着いた俺は、桜の木の下にフナを置いておく。
「おーい、ルナ。ありがたいけど、これは受け取れないわー。だからお前が
食べていいぞー」

その言葉があいつに届いたかなんて分からないけど、その時俺はそうするのが一番
良い様な気がしていた。
またアイツに会えたら、なんて思いながら。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

昨日と変わらぬ通学路を歩き、公園の前を通る。
桜の木の下を見るとフナは無くなっていた。あいつが持って行ったのか、
他の野良が持って行ったのか。まあ、どちらでもいいけれど。
こちとら、遅刻しそうな微妙な時間なのだ。

「せ、席についてくださーい」
「あれ？今日も未来ちゃん？」
「だ、だからあ……」
今日も恒例の挨拶を受けて涙ぐむ未来ちゃん。確かに二日連続は珍しいし、
谷本先生は何をしてるんだろうか？
「あ、あのー、た、谷本先生は今日もお休みっぽいですう。なので私が今日も
出席を取りますようー」
なんてこった、あの教師は。二日連続で無断欠勤とは羨ましい限りである。
そして出席を取り終えた未来ちゃんは話を続ける。
「あの、あのですね。今日は皆さんにあ、新しいお友達を紹介しますー」
「え？転校生？今頃？」
「どんな子ですかー？」

「可愛いですかぁ？」
「え、え、ちょ、ちょっと皆さん」
「男ー？女ー？」
「イケメン？」
「だ、だから質問は一人ずつ……ふ、ふえええん！」
あ、限界突破。
哀れな未来ちゃんは、転校生を紹介する前だというのに、まるで小学生かと
疑いたくなる様な泣きっぷりだ。
「はいはい、皆ー。未来ちゃんイジリはそれ位にしなさーい。
確かに見た目はちっちゃくて、どこのガキンチョが紛れてきたのかと思うけど、
これでも教師なのよー。おとなしくなさーい」
学級委員でもある美由紀が皆を嗜める。
「里谷さん……あ、あの、皆さんをまとめてくれるのは嬉しいんですが、
私の教職へのプライドをズタズタに引き裂いてる気が」
「それでは転校生さん、どうぞー！」
「聞いてくださいようっ！」
美由紀の仕切りで転校生が呼ばれ、教室のドアが開き、転校生が
教壇に上がる。
銀色の髪の毛、大きな青い瞳。睫毛は長く、小さい顔には形の良い鼻と
薄く桜色をした唇がついている。背はそんなに高くないが、スレンダーな
体つきで肌の色は紫外線など受けた事がありません、という位の白さだ。
十人中十人が振り向く、文句の付けどころが無い美少女。
皆がその雰囲気に息を飲む中、転校生はその凛とした声を放つ。

「荒屋流菜（あらやるうな）だ。よろしく」

これから始まる、流菜と俺の日常。その幕開けだった。

第六話

バケツをひっくり返した様な雨、とはよく言うが荒屋の自己紹介後の教室はえらい騒ぎになっていた。

質問質問また質問。おまえら、どんだけ荒屋の情報を仕入れたがってるんだ。

未来ちゃんは未来ちゃんで「が……学級崩壊……」なんて涙目になってるぞ。

幸いにも、一限目は未来ちゃんの授業だったので、裕也の発案により「第一回！流菜ちゃんと僕らのラブラブターイム！～でもでも、おさわりは厳禁だゾ☆～」

という意味が分からない時間になってしまった。無論、未来ちゃんの抗議は却下された上で。

って、第二回があるのか。初対面でラブラブも無いだろ。というか、男共。鼻息荒すぎだ。

あ、美由紀が切れた。

男連中を正にちぎっては投げ、ちぎっては投げしている美由紀もかなり人間離れしているが、

可愛い女の子を崇拝している裕也に至っては、やられてもやられても向かってくるゾンビみたいな

動きになっていた。遂に人間辞めたか、あいつは。

そして当の荒屋はというと、まるで肉食獣の檻に入れられた小動物の様にプルプルと震えている。

その表情がまた庇護欲をそそるもんだから、男共は更にエスカレート。

うわあ、女連中まで混ざってやがる。

美由紀の奮闘も空しく、荒屋はされるがまま。

俺も含め、前の奴らのテンションについていけず遠巻きに見ている

連中もいるが、
ここは関わらない方が無難、と思ったのだろう。荒屋を助ける人間は美由紀ただ一人だった。
その時、囲んでいた連中の隙間から見えた荒屋と目が合う。もう、ピタッって感じで。
一瞬、不覚にも照れてしまった俺だったが、次の瞬間。

「うえええええええん！」
「おごふっ」

すんごい勢いでタックルしてきやがった。
えええええええ、なんすかこの展開。
腰にしっかりと手を回され、胸の辺りに顔を埋め、グリグリグリグリされてますよ？
女の子特有の甘い匂いと柔らかな体。そして顔を上げると男共の突き刺す様な視線。
あれ？美由紀さん？なんで美由紀さんまで睨んでらっしゃるんでしょうか？
しかも怒気なんてものじゃなく、殺気ですよ？それ。
「ちょ、ちょっと荒屋さん？いきなりどうしたの？ってか、そんなにくっつかれると……
いかんいかん、正気に戻れ、俺」
「こっ……怖かったよぅ……えぐっ……みんながわーってきて……ひぐっ……」
「あー、分かったから。大丈夫、もう大丈夫だから」
なんかの壁を越えたのか、幼児退行を引き起こした荒屋を慰めながらも、
そんな泣き顔の荒屋が可愛いと思ってしまう俺は微妙な人間なんだろうか。
「おまえら、聞いただろ？はしゃぐのは分かるけど、あんまりいじ

めるなよ。
泣く程困ってんだろが」
俺の忠告を受け、皆もさすがにやりすぎたと思ったのか苦笑いを浮かべる。
その内、美由紀がゆっくり荒屋の頭を撫でながらも謝罪してくる。
「ごめんね、荒屋さん。転校生って珍しいし、荒屋さんがあんまり可愛いもんだから、
みんな浮き足立っちゃってるの。でも本当、ごめんね？」
「ふえぐっ……うん……大丈夫……」
「良かったー。みんなー聞いたよね？荒屋さんには普通に接する様に。女の子を泣かせる様な奴は
最低だからね」
「おい、裕也。お前が言いやがりますか。お前が一番キツかったぞ」
変わり身の早さには脱帽するが、荒屋はと言えば、うちの女子が揃って落とされる
裕也の微笑みを受けているにも関わらず、未だに俺の体を抱きしめている。
いいかげん俺も限界突破しそうなんですが。
「でも、荒屋さんはなんで秀行の所に逃げたのかね？もしかして知り合い？」
「んな訳ねえだろ。俺は遠巻きに見てたからな。安全地帯だと思ったんだろ」
「そっかなー、なんか秀行の所に一直線だったから、もしかしてと思ったんだけど」
急に真面目になる裕也に受け答えていると、ようやく荒屋が泣き止む。
「ひで……ゆ……き？ひでゆき……ひでゆき！」
「お、おう。瀬戸川（せとがわ）秀行（ひでゆき）だ。よろしくな」
「ひでゆきは優しい！やっぱり良い奴だ！」
はい？やっぱりって何ですか、荒屋さん。今日が初対面のはずです

が？
「なんだー、やっぱり知り合いだったんじゃん。秀行も隅に置けないねー、このこの」
「うるせえだまれけとばすぞこら」
「もう蹴られてるんですけど……」
肘でうりうりと突いてくる裕也を蹴り飛ばし、荒屋を引きはがす。
いつまでくっついてるんですか。
まだ離れたくなかったとでも言うのか、キョトンとした顔の荒屋だったが、
いきなり大声で喋り始める。
「秀行は優しいんだぞ！あたしを家に連れてってくれた！」
ぴきり。
教室の一部が固まる。主に男子と美由紀。あれ？なんで？家に入れたどころか
初めて会ったのに？そして荒屋はさらに爆弾発言を続ける。
「お風呂にも入れてくれた！体の隅々まで綺麗に洗ってくれたぞ！」
ぴきりぴきり。
あ、美由紀の髪が逆立ってる。あいつは妖怪か何かか。いやでも妖怪の方がまだ
優しそうに見えるのは気のせいですか？
「一緒に寝てくれた！朝まで抱いてくれたぞ！」
ぴきりぴきりぴきり。ぱりん。
空気がまるでガラスの様に割れた。うん、そんな感じだ。うわあ、
美由紀の目から

ビームが出そうな感じ。
「ねえ……ずいぶんと仲の良さそうなお話ね……詳しく聞かせてもらえるかしら？」
「裁判長、無罪を主張します。ほんとにいやまじで！今日初めて会ったんだって！」
「ちょっと黙っててもらえるかしら……。女の子を家に連れ込んで、お風呂に一緒に入って、
夜は一緒に寝て朝まで……死刑ね」
「詳しく聞かせろって言ったくせに……しかも、なんか悪意のある捉え方してねえか！？
おい！荒屋さん！アンタも誤解を招く発言しないでくれよ！」
「なにか変な事言ったか？全部本当の事だぞ？」
うわあああああああああ。とどめの一発を。
「裕也、手え出すんじゃないわよ。２－Ｃの学級委員長にして風紀委員の私が、この破廉恥男に
責任持って刑を執行するから」
「ＯＫ。思う存分やっちゃって下さい。美由紀さん」
「くそう！覚えてろよ裕也！てめえ、後で体育館裏に呼び出してやる！」
美由紀の後ろでサムズアップしてやがる裕也に毒づくが、その間にも美由紀の圧力が迫ってくる。
もう教室は俺の死刑執行を心待ちにしている男連中と、無責任にキャーキャー言ってる
女連中のせいでメチャクチャだ。
「……う！る！さーい！！静かにしろって言ってるでしょー！！」
こうして、朝から続いた騒ぎは、未来ちゃんの限界突破二回目により終わりを迎えるのであった。

第七話

「それで？結局アンタと荒屋さんはどんな関係なの？」
未来ちゃんの力でどうにか美由紀の刑執行を免れた俺だったが、昼の学食で追求される
立場にあった。
ちなみに席には俺と美由紀、裕也に加え話題の荒屋も一緒に座っている。
学食内でも荒屋はその容姿から目立つ存在ではあったが、今はアジの開き定食を一心不乱に
ほおばっている最中だ。やけに渋いチョイスだな、おい。
「だから本当に知らねえんだって。会ったのも今日が初めてだし」
「秀行の初めては流菜ちゃんのものになっちゃったけどね！」
「うっさい、あんたは黙ってて。さもないとその目ん玉、箸で突くわよ」
「は……はい……」
さすがに裕也も身の危険を感じたのか、美由紀の残虐発言に怯える。
一瞬、裕也へと矛先が変わらないかと期待したが美由紀の殺気は未だに俺へと向かっている。
ええい、使えない奴め。
しかし、ここで俺がいくら弁解した所で美由紀も裕也も納得しないはずだ。
後は不本意ながら、荒屋に弁護を頼むしか無い。
「なあ荒屋、本当に俺たち初対面だよな？証言してくれないと俺が大変な事になるんだ」
アジの尻尾をぱりぱりと齧っていた荒屋だが、俺に話を振られこちらにキョトンとした目を
向けながら咀嚼していた魚をごくん、と飲み込んだ後に喋り始めた。
「秀行は何か困ってるのか？ならあたしが助けてやる！人間の事は

いっぱい勉強してたからな！
紅花も秀行と仲良くなる方法を教えてくれたぞ？なんか……こう……「むにゅむにゅっ」とした
「てくにっく」ってやつ！」
ええと、荒屋さん？俺も含め、皆さんが引いてますよ？困ってはいるけどなんだか意味が分かりません。
人間の事は、ってあんた人間でしょうが。それに紅花って誰？そもそも、むにゅむにゅっとした
テクニックってなんなんすか。確かに困ってるんだけど、コイツに任せていたらもっとやばい事に
なりそうな予感がしてきやがった。
「むにゅむにゅ……意味は分からないけど、何となく破廉恥な響きね……やっぱり死刑を……」
「だーかーらー！違うって！しかも今ので破廉恥って、想像出来るお前が破廉恥だろが！」
「黙りなさい。もう何でも良いのよ、別に。要は私がアンタを殴れるならそれで良い」
「むにゅむにゅって何かな？なんだか良く分からないけど羨ましいなあー」
「完全に暴君じゃねえか！ストップ独裁政治！あと裕也は黙れ。それと荒屋、良い事言ったー、
みたいな顔で自慢げにするな」
完全にツッコミキャラになっている俺を筆頭にぎゃあぎゃあ騒ぐこのテーブルは
周りからしてみれば相当変に見えている事だろう、現に周囲の視線が痛い。
「美由紀はなんでさっきから秀行をいじめるんだ？秀行の敵か？」
また訳の分からん事を言い出した荒屋に美由紀の注意が向く。
「なっ……別にいじめてる訳じゃないのよ。私はただ風紀委員として学園の生徒が

間違った道に行かない様に注意しているだけであって……」
嘘つけ。ただのストレス発散みたいな発言してたぞ、お前。
「そうか。美由紀は敵じゃないんだな……じゃあ、あれだ！好きだから意地悪するんだな！
紅花もそんな事言ってた！でも駄目だぞー、秀行はあたしの物なんだからなー。
あ、でもでも人間の言葉の「にごうさん」だったら別にいいぞー」
「……！に、二号さんってあなたねえ！別に私は秀行の事は、な、何とも思ってないし、
そ、それに愛人なんて冗談じゃないわよ！」
「よーし、荒屋。あっちでゆっくり話をしようじゃないか。とりあえず、そのろくでもない紅花さんって人についてだ」
せっかくの昼休みはこうして俺の意思とは別の方向に進み、その貴重な時間は無駄になるのであった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「そんじゃな、美由紀。委員会頑張れよー」
「言いたい事は山程あるけど、まあ良いわ。来週にでもまた詳しく聞かせてもらうからね」
「しつこいなお前も……。んじゃ」
「美由紀。さようならだ」
「微妙に日本語間違ってる気がするけど……荒屋さん、気をつけて帰るのよ。そこの野獣に襲われないようにね」
「誰が襲うかっ！」
そんな不毛な会話を交わしつつ美由紀に別れを告げ、荒屋と学校をあとにする。

何でも家が同じ方向だったらしく、なら一緒に帰ってあげなさいよ、
という美由紀の言葉により
荒屋と帰る事になってしまったのだ。
「楽しみだなっ、秀行！これが紅花が言ってた「らぶらぶとうげこう」って奴なんだな！」
「ほんとにろくでもねえな、その紅花って人は……。ちなみに何なんだ？紅花さんって」
「うーん……紅花は……なんだろう？あたしの友達？」
いや、疑問系で返されても。こっちが質問しとるというのに。
「まあ、友達は選んだ方が良いぞ、俺にも裕也って友達がいるけど最近後悔してるとこだ」
「裕也？ああ！あの眼鏡な！あいつは秀行の友達？秀行は好き？」
「好きって……別に好きっていうか腐れ縁ってやつだよ。小学校の途中であいつが転校してきて
色々あって……気がつきゃ十年近く一緒につるんでんだよなあ」
なかば自分へと話している様な状態の俺は荒屋の視線に気づく。あれ？何か悔しがってる？
「秀行は裕也と友達……裕也の事が好き……裕也も秀行が……」
「変な脳内変換すんじゃねえよ。まあ、確かにクラスの一部の女子からはそういう方向で、なんて
頼まれたけどな」
たまに、俺と裕也の会話してる姿をカメラで撮られたりするが、あの女子連中は何を考えとるんだ。
そんな日常を思い出し自分の世界に入っていた所に、荒屋の大きな声が割って入る。
「でもでもっ！あたしの方が秀行の事を好きだぞ！よく覚えとけっ！」
はい？

最後の単語が何かおかしい気がしたが、それは……うん……なんて言うか……、

告白ですか？

突然、美少女に好きだと言われて嫌な気分にはならない。それが男ってもんだ。

しかも俺は生まれてきてこのかた、もてた試しが無い。

もちろん中学の時に一人だけ付き合った子がいたが、お互いに初めてだった事もあり

恋人らしい事もせず、どちらからともなく終わってしまった。

そんな俺が目の前の転校生に告白された。

え？なにこの展開。

「ちょっ……荒屋、何言ってるか分かってんのか？大体、今日初めて会ったばかりなのに

おかしいだろ？」

「おかしくないぞ。秀行はあたしを助けてくれた。とってもとっても暖かくて、優しくて、

あたしは大好きだ！」

そうキッパリと、全く迷いのない瞳で俺に気持ちをぶつけてきた荒屋を、俺はなんて言うか……

とても綺麗だと思った。

「えと……気持ちはすげえ嬉しいんだけど……なんて言うか、な？

まだ知り合ったばっかりだし、

お前の言う、優しかった、ってのは人違いの可能性もあるだろうし。

ちょっと時間くんねえか？」

「わかった！大丈夫！時間ならいっぱいあるからな！」

やばい、こいつは強敵だと感じた。言ってる事は変だし、俺を誰かと間違えている可能性も

存分にあるけど、まっすぐに自分に正直な荒屋は自信に満ちていた。

こりゃあ、そんなに時間は
必要じゃない気が……いかんいかん。適当に考えるな、俺。
そんな荒屋の告白も終わり、ふふんふーん、と鼻歌混じりに歩く荒屋の横顔を見ていた俺だったが
ふと彼女の顔が辛そうなものに変わった瞬間を見た。
視線の先は……公園？
そう、あの桜が咲いていた、厳密には俺の見た幻覚だった可能性もあるのだが、ともかく荒屋は
その桜の木の方向に視線を向けながら、寂しそうな顔をしていた。
「荒屋？どうした？」
「……ふえっ！？な、なに！？」
「いや……そんな驚かれてもアレなんだが。なんか嫌な思い出でもあんのか？この公園に」
「そ、そんな事ないぞ！？あたしはいつだって元気元気ハナマルなのです！」
おおう、なんかスイッチ入ったぞ、こいつ。
でもやっぱり気になるな、さっきの表情。もちろん知り合ったばかりの女の子の過去を
根掘り葉掘り聞くほど野暮な正確はしてないので、なるべくこの場を明るくしようと務める。
「そ、そういえばな？俺さ、一昨日ここで猫を拾ったんだ。ちっちゃくてプルプル震えてたんだけど、
家に連れて帰って面倒見てやったらさ、なんか愛情湧いちまって。
昨日学校から帰ったらもう
いなくなってたんだけどさ、やっぱり寂しいもんだな、ああいうのは」
女の子は総じて可愛い動物が好きなはず。だったらこの話題にもくいついて来るかも知れないと
思った俺はルナの事を話し、荒屋の反応を見る。あれ？なんか顔赤い？

「それでそれで？その猫の事はどう思った！？」
「え……いや、まあ、なんというか普通に可愛い奴だったぞ。頭も良かったし、毛並みなんてすげえ綺麗でさ。ルナ、って名前付けてやったら喜んでたみたいだし……まあ、今頃は元の飼い主の所に帰ってるか、悠々自適に猫生活してるだろ」
「綺麗……可愛い……えへ……えへへへへへ……」
ちょっと荒屋さん、何をトリップしてるんすか？猫の事ですよ？
頭がお花畑状態の荒屋が心配になった俺だったが、気がついたら家の前まで帰ってきていた。
そういえば荒屋とは家の方向が同じって事で一緒に帰ってきたけど、まだ距離があんのかな？
「おい、荒屋。お前の家ってここからまだ歩くのか？」
「……え！？え！？家？ああ！家ならここだぞ！」
「へ？まさか同じアパートだったのか？へえ、偶然もあるもんだな。一階か？それとも二階？」
転校生の美少女と同じアパートで暮らしてる、なんて言ったら美由紀やクラスの奴らはまた騒ぎ出すんだろうな。こりゃ黙っておかねえと。
そんな週明けの学校の事を考える俺の耳に荒屋の声が聞こえてくる。
「何を言ってるんだ？あたしは秀行の部屋で暮らすんだぞ？」

第八話

同居。一つの家に二人以上の人が一緒に住むこと。ある家族の家にその家族以外の者が住むこと。
同棲。一緒に住むこと。特に、正式に結婚していない男女が同じ家で一緒に暮らすこと。
以上、某国語辞典から抜粋。
「却下！意味が分からん！」
「あたしは秀行と暮らす。「らぶらぶしんこんせいかつ」ってやつだな！」
おおう、きっちりスルーしやがった。しかもその単語教えたの紅花さんって人だ、絶対。
「大体、なんでお前と暮らさなきゃならんのだ。一般常識から考えて変だろうが！」
「いやよいやよも好きのうちってやつだな！」
「どんだけポジティブな思考回路してやがんだ、お前」
あからさまに嫌な顔をしている俺と比べ、荒屋は満開の花の様な笑顔でこちらを見ている。
そもそも男と女が一緒の家で暮らすってのが、どういう事か分かってんのか？
あああああ、こいつ絶対分かってない。だって当たり前の様に俺の部屋のドアノブを
がちゃがちゃやってるもの。
「やめいっ！ノブが壊れる！とりあえず落ち着け。な？」
ドアから荒屋を引きはがし何とかなだめようとする俺に対し、ノブから手を離そうとしない荒屋。
その時だった。
急に抵抗が無くなり、荒屋を抱えたまま後ろにつんのめり尻餅をつく俺たち。

臀部を襲う激痛に顔をしかめるが、必要以上に距離が近くなった荒屋の整った顔にどきりとしてしまう。
そうだ、こいつ頭の中身はアレだけど美少女だったんだ。
そんなどうでも良い事を考えていた俺は重要な事に気づいた。
俺は一昨日からこの部屋で一人暮らしで家族は海外にいる。一人になる生活が長かった為か、
朝の鍵閉めチェックは半ば癖のようになっている。
そして帰ってきた俺の部屋のドアが「内側から」開いた。もちろん鍵は差し込んですらいない。

おう、じーざす。
まさかまさかの不法侵入者ってやつかっ！？引っ越してまだ三日目だってのに。

多分十秒くらいだろう。その短時間で思考を元に戻した俺は立ち上がり、とりあえず抱きかかえた
荒屋を後ろに下がらせる。いや、なんで残念そうな顔してんだよ。
そして部屋の中にまだ残っているかも知れない侵入者に怯えつつ、
これからどう行動すべきかと
考え始めた時だった。

「おかえりなさいませ、流菜様。あと、そこのヘタレな顔の瀬戸口様も」

その声と共に俺の部屋の玄関に立っていたのは一人の女性。
身長は俺よりやや低めなくらいなので間違いなく１７０センチ以上はあるだろう。
少しつり目の瞳に艶めくような長い黒髪、その上どこぞのモデルかと言いたくなるような足の長さに加え
起伏に富んだその体が大人の色気を醸し出していた。

……誰？
しかも初対面でいきなりヘタレ呼ばわりされた経験は、生まれて１７年の間いちども無いぞ。
それより何より、何で俺の名前を知ってる？というか、荒屋の知り合いか？
「いつまでその間抜けな顔をさらしているのです？ささ、流菜様は早くお上がり下さい。
ああ……お召し物が汚れてしまっております。それもこれも全てそこのヘタレのせいでございますね」
「うわあ、なんだか怒りや疑問を通り越して涙が出てきたぞ。っつうか、アンタ誰だよ！？」
「やかましい事この上ありませんね。とにかく中に入りなさい。そしてさっさとお茶の一杯でも
出しなさい」
どんだけ高圧的なんだ、この女。しかし悲しいかな、俺はその圧力に負けて渋々部屋に入る。
そうして、なし崩しに入ってきた荒屋と不法侵入していた女をとりあえずダイニングのテーブルに座せ、
お茶を入れる。ちくしょう、今すぐに法治国家の象徴である警察さんに電話したいがダイニングから
発せられる殺気混じりの視線には逆らえないぞ。
「ほらよ。粗茶だ」
「本当に安物のお茶ですね……入れ方もまるでなっていない。流菜様、やはりこの話は無かった事に
した方がよろしいかと」
「あつっ！あちちっ！うう……せっかく秀行がお茶を出してくれたのに……熱くて飲めないよう……」
不法侵入な客人とは思えない駄目出しをした女の言葉に対し、荒屋は涙目でお茶をちびりちびりと
口に含んでいる。しかし人の話を聞かない奴だな、荒屋は。まあ、

この女に対してはざまあみろ。
もっとやれってんだ。
「その失礼きわまりない思考を今すぐ訂正しなさい。さもなくばこのお茶をそのヘタレな顔面にかけさせていただきます」
「エスパーみたいな事が出来る事には感心するが、アンタの思考回路と言葉遣いもどうかと思うぜ」
「……黙って聞いていれば好き勝手な事を……流菜様のお召し物を汚した上に私にまで暴言とは、万死に値します。というか死にさらしなさい」
「全然黙ってなかったじゃねえかっ」
荒屋も人の話を聞かないポジティブ人間だが、こいつに関しては駄目な方向で話を聞かない女だった。
睨み合う俺たちには目もくれず湯呑みを両手で持ち、ふうふう言ってる荒屋。
「おい、お前は何を呑気に茶をすすってやがる。会話を聞いた限りじゃ知り合いみたいだけど、一体誰なんだよ、こいつ」
「紅花だ！」
げ。
こいつが噂の「紅花」ってか？荒屋に色々と間違った知識を植え付けた諸悪の根源？
「お初にお目にかかります、瀬戸口様。桐生紅花（きりゅうべにか）と申します。ちなみに瀬戸口様には間違っても呼び捨てにはされたくありませんので、私を呼ぶ時は「桐生様」もしくは「紅花お姉様」のどちらかでお願い致します。
「心配すんな。こちとら2歩で物事を忘れる、鳥よりタチの悪い頭してるんだぜ？」
「……なるほど……それは私に対する宣戦布告と理解してよろ

しいのですね？」
「人の部屋に不法侵入した挙げ句、こんだけ暴言吐かれちゃ喧嘩売ってください、って言ってる様なもんだと思うんだが」
見えない火花が二人の間にばちちっと音を立てて飛ぶ。
そうした状態が十秒ほど続いただろうか、ふと気を抜いた様に紅花が息を吐いた。
「ちっ……まあ仕方ありませんね。私がどう言おうと流菜様が選んだ殿方。これは変えられない事実なのですから……」
「盛大な舌打ちしやがって……それで？この状況を説明してくれよ。その話しぶりからするとアンタも何か知ってるんだろ？」
「はい、簡単に説明致しますとあなたはこれから一生流菜様の奴隷として生きやがれこんちくしょう、という事です」
「わかった。とりあえず二人とも早く出てけ、そして二度と来るな」
何だか良く分からんが、この女が俺に敵意をむき出しにしていて事態は良からぬ方向に進みそうな事は容易に予想出来た。
「まあ落ち着け、秀行。奴隷は嘘だけどずっとそばにいるぞ！」
「それがそもそも意味不明なんだよ、会ってすぐにどうの……って変じゃねえか？」
「全然変じゃないぞ。あたしは秀行が好き。秀行もあたしが好き」
「待てコラ。そっちの気持ちについては否定する権利は無いが、勝手に俺の気持ちを捏造すんな」
「……違うの？」
えええええ？俺が間違ってるんすか？
「とにかく！事情を説明してくれよ。紅花さんの方が話が早そうだ……今度は本当の事をな」

「桐生様か紅花お姉様です」
「うわあ、普通に今うざいって思っちゃったよ、俺ってば。……教えてくださいませ、紅花お姉様。
これで良いか？」
「ふむ……まあ及第点としましょう。ではお話してさしあげます。流菜様もよろしいですね？」
「おーけーだ」
「では……まず最初に私どもが何なのか、それを説明致します。とりあえず……百聞は一見にしかず。
実際に見て頂いた方が話もスムーズに進むでしょう」
はい？
確かにあんたらが何者なのかは気になってるけど、見た方が？何を？頭の中にいくつかのハテナマークがぽんぽんと飛び出した俺の事など意に介さぬように、紅花がテーブルから立ち上がる。
「それでは良く見ておいてください。瀬戸口様は初めて見る事かもしれませんが、全て真実でございますので」
もったいつけた様なことを言った紅花だったが、握った右手の人差し指と中指の二本だけを立て、ちょうど額の所まであげたかと思うと、そのまま顔の中心を通し右手を下げる。
その瞬間、ぽわあっと紅花の体が発光した。俺は人体が発光している場面なんて生まれてこのかた見た事が無かったのでもちろん驚いたのだが、三秒ほどして発光が収まった紅花を見てさらに驚く。
なんて言ったらいいか……その……
頭に猫の耳。腰の辺りからは尻尾。

その二つが紅花の体にくっ付いていた。

第九話

「えーっと、まあ、あれだ。その……なんていうか、そういう趣味の人？」
「やはり理解を超えましたか。流菜様、やはりこの程度の事が受け入れられない者など
流菜様には相応しくないのです」
「そんな事ないっ！あたしは秀行と一緒にいる！」
それ、決定事項違う。というか、俺としては二人とも帰ってほしいんだが。
第一、今目の前で起こった事を疑問の一つも持たずに理解できる奴はいません。
「ですが流菜様……この様な口が悪く、がさつで粗野な者と一緒になれば流菜様の未来も
間違いなく悪い方向へと
向かってしまいます。どうか今一度お考え直しを……」
「やだっ！あたしは秀行がいい！紅花の馬鹿っ！」
「る……流菜様……っ」
まさにがびーんと言った擬音がぴったりな表情を浮かべ、紅花の表情が固まる。もっと言ってやれ。
「あたしはここにいる！ずっといる！」
あ、やっぱり駄目。このままこいつが居座っちまったら根本的な解決にならない。
「流菜様、わがままもそれまでございます。私は流菜様の為を思って進言させていただいているのであって、
決していじめているとか嫌みで言っている訳ではないのですよ？」
ちくしょう、俺には嫌みで虐めてたくせに。荒屋と俺では天と地ほど態度が違うなあ、このネコ耳シッポ付きは。
そんな事を考えつつ荒屋の方を伺うと、紅花には口で勝てそうにな

いと悟ったのだろうか、唇を噛み締め涙を堪えてーー堪えてーー爆発した。

「うええええんっ！　紅花のばかぁっ！」

「うがふっ！」

あれ？なにこのデジャヴュ（既視感）。

今日の朝にもくらった気がする荒屋のタックルを受け止めようとしたが、情けない声を出してしまう。

というか何で俺の方に突っ込んでくるんだ。ほら見てみろ、紅花の人を殺せそうな視線がこっちに向いてるじゃねえか。

その視線から早く逃れたい一心で荒屋をひっぺがそうとした俺はもう一つ絶句する事になる。

そりゃそうだ。

俺の腕の中には一昨日拾ったルナがいたんだから。

※※※

「…………理解したくはないが理解するしか無いんだろうな……」

「ええ、これで私がお話出来る事は全てです」

紅花の話によると荒屋や紅花は何と言うかーー猫らしい。正確には人間にもなれる猫。いや、猫にもなれる人間？

ってそんな事はどうでもいいんだ。

問題はなんでその猫が俺の事を好きになったのかって事だ。もちろん拾ったり世話はしたが、それもたった一日の事で、少し心の優しい奴なら誰だって面倒を見ただろう。

現に俺も同情はしたけど飼ってまで世話しようとは思っていなかったのだから。

「んで？本当の所は？」
「と言いますと？」
「だってよ、さっき紅花さん自身が言ったんじゃねえか。私がお話出来る事は、って」
「……馬鹿だ阿呆だヘタレだとは思っていましたが、なかなか鋭い様ですね……」
よくもまあ、そんないっぺんに俺を罵倒する言葉を会話に組み込めるもんだ。
それにしても、だんだん馴れてきた俺が恐ろしいぜ。
「誰に聞けばいいんだ？とりあえずもっと詳しい事を知っとかないと、俺のこれからが何か危うい気がするんだが」
「それは私の口からお話しする訳にはいきません。ええ、いきませんとも。というか私はこの話には反対だったのです。
気高く美しい流菜様があなたの様な人間となど……考えていたら苛々してまいりました。一発殴らせなさい」
「美由紀みたいな奴だなお前はっ」
世の中の女性が強くなって来ているとは言うが猫の世界も同じなのかよ、と言いたくなる様な紅花の視線に怯える俺。
ああん、もうどうにかしてくれ。
肝心の荒屋といえば俺の腕の中で未だに、ごろにゃんごろにゃん言ってるし。この現状をどうにかしてくれる存在が今目の前に表れたら俺は一生付いていっちゃうかもしんない、なんて考えていた時に
聞き覚えのある声が耳に入ってきた。
「やあやあ！元気だったかね！息子よ！！そして我が家のお嫁さん！！」
前言撤回。
こいつに付いて行くくらいだったら、紅花の殺気をくらってた方が

ましだ。
忘れようと思っても忘れられないこの声の主。
一週間前に日本から飛び立ったはずの親父だった。
「おいこら腐れ親父。てめえ何しに帰ってきやがった。納得いく説明をしねえと今すぐ殴るぞ」
「……今この右頬で疼いている痛みはなんなんだろうね？僕の記憶が正しければ君の左フックが当たった気がするんだけど……」
「黙れこの野郎」
「みぎゃふっ」
右頬を手で押さえながらさめざめと泣き崩れる親父を踏みつける。
「早速説明してもらおうじゃないか、てめえさっき嫁がどうのって言ってたよな。まさかとは思うが……荒屋の事じゃねえよな？」
「いや……だから……説明したいんだけど……足をどけてくれないかな……」
泣きながら訴える親父を椅子に座らせる。
「よし、発言を許可する。返答次第ではただじゃおかねえからな」
「うん……まずその女の子の名前は流菜ちゃん。知ってるかもしれないけど彼女は猫と人間のハーフだ」
「さーて殴らせてもらおう」
「いやっ！だから！本当の事だよ？」
「うるせえ！猫と人間のハーフなんて生まれる訳ねえだろが。おちょくるのもいい加減にしやがれ！」
「それが生まれるんだな。正確に言うと彼女達はただの猫じゃないからね。いわゆる「猫又」の子孫
なんだよ、これが」
猫又……？昔、親父から聞いた事がある名前だったけど、空想の妖

怪だったはず。
それが実際にいたってのか？
「つうか、何で俺とその猫又の子孫が関係してくるんだよ」
「うーん、関係はおおありなんだよねえ。なんたって君の許嫁だから」
……オーライ。これは好きなだけ殴ってくれって合図だな？よし思う存分殴らせてもらおう。
「ちょっと秀行くん？目がいっちゃってる気がするんだけど？」
「安心しろ、痛くねえ様に眠らせてやるよ」
「永眠！？却下！その考え却下！」
わたわたと紅花の後ろに隠れる親父。あ、紅花が俺と話してる時より数倍嫌な顔してやがる。
「瀬戸口様……ええと、秀行様の方です。今の話は全て本当の事であり変えようの無い事実です」
「うわ……紅花に言われると妙な説得力が……まあ、今の話を聞くとさっきまで紅花が口にしてた内容も辻褄があうよな」
「はい。私としてはこのお話は良縁だとは思っていませんので」
「随分きっぱり言ってくれたな、おい……」
「当然です。この気高く美しい流菜様の伴侶となるべきお方に、あなたの様なヘタレがなると想像しただけで……
ああっ！流菜様がっ！流菜様があっ！」
やばいぞ。こいつもスイッチ持ってやがった。しかも気高きて。とてもそうは見えないんだが。
「とにかく落ち着けよ、な？俺だって今いきなり言われて頭が追いつくもんでもないし……今日の所は流菜を連れて帰ってくれないか？」
「それは無理です」
「なんでっ！？即答っ！？」

こいつ、俺と流菜を引き離したいのか、くっつけたいのか。意図が全く分からん。
「仕方ないのです。私も出来ればこの家に二人っきりで住まわせるなど絶対にしたくないのですが……それが当主様のご意志ですから。ただ黙って見守るのみ……です」
うわ苦虫噛み潰した様な顔になってるよ、本気でなんだろうなあ……。
「んで当主ってなに？」
「流菜様のお父上でございます。荒屋家の十七代目ご当主であらせられる荒屋清吾（あらやせいご）様……凛々しくも儚げなお姿、類いまれなるその知性、程よく引き締まったその体……って何を言わせるのですか」
「いや、誰もそこまで聞いてねえよ。ぶっちゃけ、ちょっと引いたぞ」
紅花がその清吾って人をそう思っているのかは、鈍感とよく言われる俺にもはっきりと分かった。その前になんで紅花は清吾さんが引き締まった体をしている事を知ってるのか。ともかく、うっとりした表情で当主様とやらを褒めちぎる紅花は、ややトリップ気味になりながらも話を続ける。
「こほん……とにかく清吾様はあなたと流菜様を許嫁として認め、二人が一緒に暮らす事を望んでいます。
私共はそのお言葉に従い動くのみだったのですが……ああっ！やはり納得出来ないっ！」
「まあまあ、紅花さん。落ち着いて落ち着いて」
「くっ……！元はと言えば時雨（しぐれ）様、あなたのせいで流菜様はっ……！」
「ええー、なんで僕だけのせいなのかなあ？清吾君だって共犯のはずじゃーー」
「うるさいです。もういいです。私。あなた。刺す」
「こわいよっ！？片言なのがさらに恐怖っ！」

すでに目の奥が濁りきった紅花の言葉に親父は震え上がるーーん？ちょっと待て？

「なあ親父。今「親父のせい」って言われたよな？それに清吾って人も共犯ってどういう事だ？」

「ああ、それはね。昔ーーとは言ってもちょうど二十年前くらいかなあ。僕と清吾君に子供が生まれたら許嫁にしてみよう、って言ったんだよ。ちょうど二人で見てたテレビドラマでね、親同士が決めた許嫁が出会って、みたいな話がやっててさ」

「お前かっ！やっぱりお前が全ての元凶なのかっ！？死なす！五十回死なすっ！！」

第十話

ぼろ雑巾、という言葉がピッタリはまる感じになった親父はさておき。
俺の今の最優先事項は荒屋と紅花、親父の三人をどうやって追い返すかだ。
「大体の事情は理解した。まあ何かの悪い冗談としか思えない事情だけどな……んでもそこに俺の意思は尊重されないのか？」
「はい」
「おおう……一点の曇りもない目で言い切りやがったな」
「ええ、これはもう決定事項でございますので。ご当主様の言葉は絶対、そして私はその言葉に従う義務がございます。秀行様にはこの状況を受け入れて頂くしかないのです……不本意ながら」
「そう思うならご当主様に直訴してくれ」
「いいから黙って従いなさい。流菜様のご決心がここまで強い以上、あなたに託すしかないのです」
有無を言わせぬ表情で俺を一喝する紅花。その瞳には「言う事聞けよこんちくしょう」みたいなオーラが
漂っているが、こちらとしても何とかしたい状況なのだ。
どうにかしてこの場を切り抜けようと思案していると、俺の腕の中にいる荒屋ーーもといルナと目が合う。
お前いいかげん話し合いに参加しろよ。あああ、にゃんにゃん嬉しそうに鳴いてるけどお前この状況、絶対に理解してないよな。
「でもでも！ここってアパートだぜ？大家さんの許可とかいるんじゃないのか？」
「許可は得ています。私の力で大家の方は流菜様をあなたの妹と認

識しておりますので」
「今さらっと変な事言わなかったか？……まあ尻尾が付いてる時点で何でもありってか……ちくしょう、勝てる気がしねえ」
「ちなみに食費などの生活費も荒屋家から捻出されます。部屋もここは二部屋ありますし、問題は無いかと」
「それ以前の問題が大有りなんだけどな」
やけに手回しがいい紅花に徐々に追いつめられ、遂に逃げ場が無くなってきた俺はがっくりとうなだれる。
「わかった……一緒に住むよ……ただし！一週間！一週間暮らしてみて無理だと思ったら、俺が直接ご当主様の所に直訴に行くからな。この条件が飲めない様だったら意地でも今回の話は無かった事にする。というか荒屋の事を心から嫌いになってやる」
俺が出した譲歩案に対してなのか、はたまた荒屋を嫌いになると言った俺に対してなのか、紅花の目が軽く吊り上がる。
こええ、怖すぎるよお前。さっき力でうんたらの話を聞いたから尚更だよ。
そして当の荒屋はというと紅花にぺこぺこと頭を下げ、潤んだ瞳で見つめてやがった。
おそらく現状で平行線をたどるより、一週間でも一緒にいられる方をとったのだろう。その気持ちが少しばかり俺の良心をチクリと刺激する。
「……良いでしょう、その妥協案を飲みます。ご当主様は私が何とかしますので、一週間……流菜様の事を宜しくお願い致します」
「ああ、とりあえず一週間頑張ってみるさ。ただ……一週間後の約束は忘れんなよ」
「まあ七日もあれば、流菜様の可愛らしさにあなたの方から一緒に暮らさせて欲しいと言う様になるでしょう。泣いてひれ伏し懇願する事と思いますが」

「へいへい。あ、あと一個聞きたいんだけどさ。荒屋って今の状態から人間に戻るのってどうするんだ？
自由に姿を変えれるのか？」
俺と荒屋が一緒に暮らす上で、この問題は結構重要だ。女の子と暮らしているってのと、猫と暮らしてるというのじゃ
周りからの目も変わる。猫だったら高校生が一緒に暮らしてても変ではないだろう。もちろんネコミミシッポ付きの女の子だったら完全にアウト。
「秀行様が何をお考えなのかは大体分かりますが、その望みはかなえられそうにありません。
流菜様はまだ未熟な体ゆえ、自由に変化は出来ません。いつ体が変わるのかですが……おそらく負の感情ーー悲しい事や
辛い事があった時には猫のお姿に、反対に嬉しい事や安心出来る状況になった時に人間のお姿に戻られる様なのです」
なんてこった。俺の計画が三秒で無くなった。しかも感情で変わるとは中々に厄介だぞ、これ。
「そうか、だからさっき紅花に荒屋が切れた時、猫の姿になったんだな」
「はい。ですからもし秀行様が流菜様に猫のお姿でいて欲しい、と思うのであれば流菜様に辛くあたれば良いのです」
「……お前、俺が絶対に出来ないって分かってて言ってるだろ」
心の中をのぞいてみました、と言わんばかりにずばりと当てられた俺は愚痴っぽく言い放つ。
ちっくしょう、紅花め。悔しいけど勝てそうにない相手だってのが今日の一件で良く分かったぞ。
「ふふ……それでは秀行様、流菜様を頼みましたよ？何かあった場合は……分かっていますね？」
「なんか、首の所にきらりと光る刃物の様な物が押し付けられてるんだけど、気のせいかな？」
「冗談です、それでは時雨様。さっさとご当主様の所に報告に参り

ますよ？」
「え……やっぱり僕も？せっかく一時帰国したんだからぐえふっ」
結局、親父が帰って来た理由も清吾って人との関係も分からずじまいだったが、今は引き取ってくれた紅花に感謝。
ワイシャツの襟を、むんずと掴まれて引きずられていく親父を見送りながら手を振っておこう。
あ。泡吹き始めてる。
さて……俺の横にちょこんと座り一緒に見送っている荒屋……今はルナの状態か。
こいつとの共同生活が始まる……あ、軽い偏頭痛がした。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※

紅花と親父が去って三十分。
猫状態の荒屋……ああ、もうめんどくせえ。これからは猫の時はルナでいこう。
問題のルナはといえば俺の膝の上で未だにごろごろしていた。
「なあ……お前いつ戻るんだ？いや、俺としてはこのまま猫の状態が助かるんだけど」
呟きにも似た声を発した俺を見上げたルナは、その小さい瞳を数回瞬きさせ、うなあ、と鳴いた。
「ええいっ！意思疎通が出来んっ！もう良いや、早く戻れっ」
「ふにいっ！」
我が家にちゃぶ台があったら間違いなく引っくり返す勢いで立ち上がり、うがーと両手を上げる。
もちろん膝の上にいたルナは宙に放り出される格好になったが、そこはさすがに猫。
くるりと器用に回転した後、床に着地を決める。しかしその目は心無しか俺を睨んでいる気がした。

おそらく気分よく寛いでいた所を邪魔されたからだと思うが……ねえ、お前のせいでこんな感じになってるんだよ？
全部とは言わないが多少は責任もあるんじゃないかな？そう思わないかい？
がっくり膝をついた俺の腕をその前足でぽんぽんを叩くルナ。いや、慰めてくれるのは嬉しいんすけど、
それどころじゃねえっす。
「なあ、お前って猫の時は喋れないんだよな？俺の言葉は理解出来るのか？」
ふと浮かんだ素朴な疑問を口にする。するとルナは、にあ、と鳴き首をちょこんと縦に振る。
そうか、とりあえずこっちの言ってる事は分かるんだな。良い事聞いた。
「どうだ？人間に戻りそうか？」
「ふにい……」
今度は首を横に数回振るルナ。仕方無い……とりあえず今は自然に元に戻るのを待つしか無いか。
するとルナは俺に向かい、すがる様な目で見つめてくる。そして前足でお腹の辺りをぽむぽむと叩き、
ふにゃあふにゃあ、と繰り返す。
「なんだ？ええと……そうか！腹減ったのか？」
正解！と言わんばかりに首を強く縦に振る。そういえば帰って来てからというものの、ごたごたが多すぎて
空腹を認識してる暇もなかったもんなあ……。
「そんじゃ、ちょっと待ってろよっと」
台所に行き、冷蔵庫の横に出しっぱなしのーーつまり、昨日の帰りに買って来たは良いが与える相手がいなくなってしまった猫用の食事を用意する。
「うなあ」
「うわっ、びっくりしたあ……。なんだよ、もう用意出来るから待

ってろよ」
いつの間にか俺の足下にまとわりついてきたルナに食事を差し出してやろうと思ったが、一つ気がついた。
こいつ猫じゃなくて猫の人間のハーフだったんだ、よく考えたら一昨日のねこまんまは人間だって食べれるけど
キャットフードって食べれるのか？
「なあ、おい。食事ってこれでも大丈夫なのか？」
「にゃあ」
肯定の動き。どうやら大丈夫だったらしい。なかなかすげえな、人間と猫のハーフはキャットフードも可能なのか。
小さい口で猫缶の中身をもそもそと食べるルナを見て、自然と暖かい気持ちになる俺。
なんだかんだ言って俺は誰かといる事に飢えていたらしい。小さい時から家を空けがちな両親で兄弟もいない。
一週間とは言え、一緒に寝食を共にするっていうのは少なからず俺の気持ちのささくれだった部分を柔らかく
してくれているルナに少し感謝の気持ちが出てくる。
「んー……なんというか……その……これからよろしくな」
うわ、意外と恥ずかしいな。相手が完全なペットだったらまだ良いけど、こっちの言葉は理解出来るんだもんな。
改めて言うとなんというか、照れが出る。
ルナは食事を一度止め、こちらを見上げる。その顔に浮かぶ表情はびっくりした様でもあり、でも大部分は嬉しい、
という感じの顔だった。ん？ちょっと待てよ？紅花の話によるとこいつの人間に戻る条件って……
「にゃあ！」
元気よく鳴いたルナの体が発光したかと思うと、その小さな猫の体はぐんぐん大きくなり、女性のラインを
形成していく。そうか、嬉しかったり安心すると戻るって言ってたよな。紅花の言葉を思い出した俺だったが、

ある重要な事に気づいた。
こいつは今ーー何を着ている？
「ああっ！たんま！ちょっと待て！ああ！」
そこに立っていたのは一糸まとわぬ荒屋の姿。
ご丁寧にネコミミシッポ付き。

「秀行っ！秀行っ！」
「だああっ！抱きつくな！そんな！格好で！ああっ、気持ちいい……じゃなくて！服、服はあっ！」
こちとら高校生の男子。それなりに色んな妄想をし、色んな所がパワーチャージされるお年頃なのだ。
俺……これから大丈夫なのか？

第十一話

二人なのか、一人と一匹なのかはわからんが、最初の食事を軽めで済ませ、気づくと時計の短針はすでに夜の九時を指していた。しかし今日は朝からとんでもない一日だったなあ。

相変わらず流菜は俺の膝の上でごろごろしてるし。あの、いい加減どいてくれませんかね？

その時、風呂場の方からピーピーという電子音が聞こえてきた。

「っと、沸いたか。よし流菜、先に風呂入ってこいよ」

ここはやはりレディーファースト、いやレディーなのか雌なのかは微妙だけど。

「あたしは後でいいぞ。一番風呂は旦那様からだ！」

「お前、世話係は選んだ方が良いぞ？また紅花の入れ知恵だろ」

「でもでも、紅花はそうしろって！世の中の男は旦那様って呼んだらメロメロだって言ってた」

その発想はどうかと。

まあ、そういう事なら有り難く頂きますかね。リビングのソファでテレビを喰いいる様に見始めた流菜を残し、

脱衣所で服を脱ぐ。

軽く体を洗い、湯船に浸かると全身の軋みがほぐれていく様な感覚だ。

「ふいー、「風呂は命の洗濯だ」って誰かが言ってたけどその通りだな、こりゃあ」

などと独り言を呟き、今日あった事を思い出しながらゆっくりと体を伸ばしてーー

「旦那様！お背中お流しします！」

「うわあっ！！」

本当に心臓飛び出るかと思った。
勢い良く開かれた浴室の扉の前には三助の格好をした流菜が、やたらと朗らかな笑顔で立ってやがった。
「旦那様、お湯加減はいかがですかあ？」
「もう勘弁してくれよ……突っ込みどころが多すぎて……」
その格好はどこから仕入れた知識だ。あと、どこで用意してきた。
第一、年頃の男子の浴室にいきなり入ってくんな。
疲れからだろうか怒る気も起きず、ぐでえっ、となっている俺の目の前に来た流菜は「良いよね？良いよね？」
とでも言いたげなキラキラした瞳で見つめてくる。
「はあ……どうせ出てけって言っても聞かないんだろうな……」
「ささっ！こちらに！」
「へいへい……」
とりあえず見られて恥ずかしい部分は鉄壁ガードした上で椅子に座ると、流菜は鼻歌混じりに俺の背中を
流し始める。
「どうですか？旦那様。気持ちいいですか？」
「その聞き方はやめてくれ。何かいかがわしい店に来たみたいだ」
「あれ……？おかしいな……」
「それも紅花か……本当にろくでもねえ……」
今度会ったら……言えないなあ、有無を言わせない感じだったし。
どうせ「流菜様に背中を流してもらっておいて
何と言う事を」とか言いそうだしなあ。
「秀行、今日は楽しかったな」
ぼんやり考え事をしていた俺に流菜が問いかける。
「楽しいって、お前なあ。こっちは色々ありすぎてクタクタだよ」
「でも秀行はあたしと暮らしてくれるって言ってくれた。それが嬉しい」
「まあ、ほぼその場の流れみたいなもんだったけどな」

「でも嬉しいぞ」
その言葉に振り向くと、流菜はそりゃあもう嬉しそうに、にこおっと微笑みを浮かべている。
流菜の笑顔に不覚にもときめいてしまった事は内緒にしておこう。
きっとのぼせ始めてるんだ、俺。
「っていうかさ。今更だけどお前は恥ずかしくないのか？その……男の背中流すなんて」
「全然！秀行が喜ぶならあたしも嬉しい！それに一度見てるしな！」
……はい？
いつ俺の裸見たって？
俺は少しぼうっとなった頭で過去の記憶をーー思い出す事なく気づいた。
そう、一昨日こいつを拾った時、汚かったこいつを洗って。

「うわーーーーーーー！」
「ふにゃあっ！？」

なんてこった。
あの時は完全に普通の猫だと思ってたし。
ってえ事はなにか？俺は目の前の美少女（半分猫）に、体の隅々まで見られてたって事か！？
上も真ん中も……もちろん下も！
「な、なあ、お前さ。見た、って事はその……全部覚えてんのか？」
「もちろん！」
はい、そこ。親指立てんな。
「じゃ、じゃあ……やっぱり……こ、股間なんかも……」
「……？こかん？ああ！可愛かったぞ！家の父様より全然可愛い！」
「みひゃあああああああああああああああああああ」
「どうした秀行っ！？なんか顔が真っ赤な上に、ぐねぐねになってるぞ！？」

みんなごめんな。俺はどうやらもう、お嫁に行けないらしい。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

そそくさと風呂を出た俺は冷蔵庫の中からミネラルウォーターを取り出し、喉を潤す。
ああ……水がこんなに美味く感じるのって初めてかもしれない。
あの後、さっさと風呂から出ようとした俺を引き止め、一緒に湯船に浸かろうと言い出した流菜の
お誘いを丁重にお断りした俺は何とか平常心を取り戻して今に至る訳だが。
さして興味の無いスポーツニュースを眺めていると流菜が脱衣所から出てくる音がした。
「良いお湯加減でした！」
「そういう事はちゃんと言えるのな」
「勉強したからな！」
もっと違う事を勉強した方がお前のためになる気がするんだが。
「うっし、そんじゃそろそろ寝るとしますかね。空いてる方の部屋に紅花が持って来た布団があるから、
自分で敷いて寝てくれ」
あ、今こいつクエスチョンマーク浮かべやがったな。絶対一緒に寝る気だっただろ。
「残念だが……お前は一人で寝るんだ。いや、ある意味俺も残念な部分があるんだが……ってそんな事はいいんだ。結婚前の男女が一緒に暮らすだけでも変なのに、一緒に寝るなんてもってのほかだ」
「でも紅花が「殿方との初夜はムード満点で」って……」
「お前、もうあいつの言う事聞くな」
こいつの将来に責任持ってんのか、あいつは。

「とにかくだ。夜は別々に寝る。これが一緒に暮らす上でのルールだ」
「ふにう……」
「そんな声出しても駄目なもんは駄目だからな。俺だって色々と我慢が効かなくなるかもしれんし」
風呂で背中を流されてる時でさえ、心臓はばくばく言ってたし下手すりゃマイ・サンが目覚めてたからな。
とにかく、ここはきっちりと線引きしとかないと。
「えぐっ……秀行が……秀行がいじめるうっ……」
「どこかだっ！むしろお前の事を考えた発言してるだろうがっ」
「くそうっ……女の涙は最強の武器だって聞いてたのに」
「嘘泣きかよっ！おい、お前軽く舌打ちしただろ。なあ」
危ねえ。一瞬騙されそうになった。
その後も喚く流菜を何とか説得し、俺もベッドに入る。
ああ……長い一日だったなあ……いきなり転校生が許嫁って分かって、かつ一緒に暮らす事になって、
風呂にも入ってきて……あああああ、駄目だ思い出したら駄目だやめろやめろ落ち着け落ち着け。
頭の中を一回リセットし、とりあえず目を瞑れば寝れるだろうと考え、このまま夢の世界にーー

「ひでゆきいんっ」

行けなかった。
あろう事か俺のベッドの中に、噂の猫がもぞもぞと入ってきやがりましたよ、ええ。
「おまっ！お前っ！どこから入ってきた！」
「え？そこからだぞ」
流菜が指で示した先には軽く空いた窓が。
エアコンの風が少し苦手な俺は、確かに窓を開けて寝てたけど。

「だからって入ってくんなっ！さっきまでの俺の説得に使ったエネルギーを返せ！」
「あったかあい」
「だから聞けよ！？」
こいつが人の話を素直に聞く様な奴じゃない事を忘れてた。
「もう駄目だ……体が疲れて言う事聞かなくなってきた……」
「じゃあ、元気になる方法知ってるぞ！」
「寝るってのに元気になってどうすんだよ……もう良いや。今日はこれで我慢するから早く寝てくれ……」
こうなったら瞑想しつつ、悟りを開くしかない。
素数でも数えるんだっ。
これで明日が休みじゃなかったら完全に学校はサボタージュしてただろう、と思いながらも流菜から伝わる
人肌のぬくもりの前に俺が一睡も出来なかったのは当然の結果だろう。

第十二話

「め……目が……頭が痛い……」
昨日の疲れに加え、夜の乱入事件により一睡も出来なかった俺。
もはや眠気を通り越して、ズキズキと痛む頭を押さえながら何とかベッドから起き上がる。
そんな俺の横には一匹の猫ーーじゃなくて、今度は見間違いではなく銀髪の女の子が可愛らしい寝息を立てていた。
ちなみに俺の睡眠不足の元凶はこいつだ。
「ちくしょう……人の気も知らないで……とりゃっ」
「みっ」
何となくイラッとしたので額にデコピンを当てるが、変な声を出しただけで起きる気配も無かったりする。
しかし、こうして寝ている美少女……いや、半分猫なんだが……とにかく可愛い女の子と同じベッドで朝を迎えるという、思春期を絶賛経験中の男連中が泣いて羨む様な環境である事を自覚した俺は、気恥ずかしさを覚え、ベッドから起き上がる。
「さてと……顔でも洗ってくるかな」
洗面所に向かい軽く顔を洗う俺。
「タオルタオル……」
「どうぞ」
「おっ、さんきゅう」
「いえ」

……ん？

「うおうわあっ！」
紅花がいた。

何ていうか、鏡越しで俺の背後に立っていやがった。ちょっとホラーな雰囲気で。
「まったく。朝から品性の欠片も無い声を出すのですね」
「こんなドッキリ仕掛けられれば、品性も吹っ飛ぶわっ！」
「む。ドッキリとは失礼な。こうして私が自ら様子を伺いに来ているというのに」
「つうか、頼んでもいねえよ。大体だな、土曜の起き抜けに背後にお前みたいなのが立ってたら誰だってびびるのが普通だろが」
こいつの神出鬼没っぷりはデフォルトの機能なんじゃないか、と疑いたくなる気持ちを抑える俺。
「そんで？今日は何の用事だ？」
「ですから申し上げた筈です。様子を伺いに来た、と」
「え？まさか本当にそんだけ？」
「それだけ、とは随分ですね。私にとって流菜様を青臭さ溢れる鬼畜から守る事は何事にも代え難い仕事なのです」
「なあ、一応聞くけど……いつ俺が鬼畜みたいな事をした？」
当たり前だ。俺はあいつを襲うどころか一晩耐えたんだぞ。あの襲撃（誘惑）の中。
「それでは聞きますが、たった今あなたの部屋から出て来た男物のTシャツとショーツだけの流菜様のお姿をどう説明して頂けるのですか？」
紅花が指差した先にはまだ寝ぼけているのか、目をこすりつつ俺の部屋から出てくる流菜が。
「いや、あれはお前が持たせた服だろが」
「そこで少しでも慌ててくれたら可愛げがありますのに……」
「余計なお世話だ」
「ふみ？べにか？」
「おはようございます、流菜様。良くお休みになられましたか？」
「うん！秀行がずっと抱いてくれたからな」

「………くっ！」

「おい紅花。お前がいらん事教えたからだろが。自業自得だっつうの」

「分かっております。それもこれも全て流菜様の幸せの為………時に秀行様。あなたの寿命があとどの位あるか分かりませんか？もし分かっていればお聞かせ下さい。出来れば近日中が理想なのですが」

「さらっと酷い事言うな、お前」

昨日もそうだったが、こいつは俺にどうして欲しいんだ。あと流菜、そこは「抱いて」じゃなくてせめて「抱いてて」とかに変えろ。

「それでは朝食に致しましょう。すでに準備は出来ておりますので」

「へ？わざわざ作ってくれたのか？」

「ええ、流菜様と私の分は」

「やっぱりかっ！しかもお前、人の家の冷蔵庫を勝手に開けてんじゃねえよっ」

「これは異な事を。この家の物は流菜様の物でもあるのです。という事は私の物でもある、という事です」

「ジャイアンか、と突っ込みたい所だがそれ以前に突っ込む所が多すぎる……」

「二人とも喧嘩なのか？喧嘩してるのか？」

「いいえ、この男が一歩的に突っかかってきているだけなのですよ」

「そうか！秀行はもっと「おとな」にならなくちゃな！」

「もう好きにして下さい……」

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

かくして朝食を食べた（もちろん俺は自分で作らされたのだが）俺たちはリビングで紅花の煎れてくれた

お茶を飲みつつ今後の詳しい事、そして荒屋家について話していた。
「さて……まずは荒屋家についてだけど、猫又……って妖怪なんだろ？確か親父がそんな事言ってたけど」
「ええ。その通りです。猫又とは、永い時間を生きた猫が神に近い存在となり、その姿を人間に変えた者でございます。その細胞組織は人間と酷似しておりほとんど変わらないと言えます」
「……どこぞの人型決戦兵器みたいな話だな」
「はい。我々はこの酷似した細胞システムを、オーナインーー」
「待て待て待て待て。その名前は何か版権的にまずい気がする」
「そうですか……結構気に入っている名前なのですが……」
「それは置いといて。んで？荒屋家ってのはここら辺の親分みたいなものか？」
「そうでございます。荒屋の猫はおよそ八百年程前からここの土地に住まう猫達の当主として治めてまいりました。
そして四百年程前に猫又として生まれ変わったのでございます」
「はっぴゃく……すげえな鎌倉時代くらいだろ？それ。んで？紅花のご先祖様はその当主様に仕えてきたんだよな？」
「ええ。我が桐生家は荒屋の……文字通り盾となり尽くしてまいりました。そして荒屋家の当主が猫又となると
時を同じく桐生も猫又となったのでございます」
「でも猫又になったからって、普通は猫なんだから猫同士と結婚とかするもんなんじゃねえの？」
「それですが……その……なんと言いますか……」
今まで饒舌だった紅花の口調が急に重くなる。
「なんだよ？ここまで話したなら言ってくれって。そもそも、いつから流菜のご先祖様は人間と暮らしたりする様になったんだ？」
「はあ……仕方有りませんね。ちなみに荒屋にとって最初の猫又……清十郎様がなぜ猫又になったのか。

それは……人間の女に恋をした所から始まります」
「おおう、何だか物語の予感だな。って事はあれか？人と妖怪の許されざる恋って感じで？」
「いえ。お相手が近所の器量よしの娘さんだったので、猫達は諸手を挙げて賛成したそうです」
ズココー、という古くさいコントに出て来そうな効果音と共に俺はテーブルに突っ伏す。
「そもそも清十郎様が猫又になろうとしたきっかけは、その娘さんと人間の姿でいちゃつきたいと思ったからだそうで」
またもやズココココーと突っ伏す。どんだけ軽いノリだ、それ。
「で、でもさ？相手の親は反対しなかったのか？」
「いえ、何でもその娘さんの一家は大の猫好きだったそうで。即、祝言」
「普通は悲恋の物語になるはずだろが……」
大体、猫好きだからって元・猫と結婚さすな。
「そこからは清十郎様のお言葉もあり「猫と人間だって愛があれば大丈夫」という風潮になったそうです。
しかも清十郎様が結婚された年は、猫又になれた他の者もこぞって人間と結婚した様で」
「美智子様フィーバーかっ」
「ともかく、そうして荒屋を始めとする猫又達は人間の生活に深く入り込み、今現在に至るという訳です。
まあ、大分猫又の血は薄れてしまいましたが」
「すげえ強引な流れな気もするが……」
「そこはほら、ご都合主義（作者の意図）というものです」
「なるほど……」
ともかくこれで荒屋家の歴史について分かった訳だが、問題はこれから俺と流菜がどうするかだ。
一週間という期限を決めたものの、毎日寝不足になるのは勘弁。
俺は話から置いてけぼりをくらっていた流菜に目をやる。

うわあ、しっかりお休みですよ、この子。
「こら、起きろ。お前に確認する事がある」
「み？……ふわあ、良く寝た」
「あのな？お前は……その……俺と本当に許嫁でいるつもりなのか？」
不意の質問に一瞬キョトンとした表情を浮かべた流菜だが、やがてまっすぐな瞳で俺を見つめ言い放つ。
「当たり前だ。あたしは秀行以外のオスなんか興味ない」
駄目だ。俺はこいつのこの表情に弱いんだって事が良く分かった。
「そうか……とりあえず一週間頑張ってみるとしてもだ。夜は別々に寝る事。分かったか？」
「わかったー」
それ、絶対分かってないだろ。
「時に秀行様。こちらを」
俺と流菜の不毛なやりとりを静観していた紅花が俺の目の前に封筒を差し出す。
「なんだこれ？」
「流菜様との生活費にと。清吾様と時雨様からのお心遣いです」
「へえ、あの駄目親父が気が利くじゃねえか。そういえば親父は？」
「清吾様の所へ一緒にご報告にあがった後、また海外へ発たれました」
「それはなによりだ」
「ちなみに秀行様へ時雨様からご伝言がございます。「絶対に流菜ちゃんと仲良くする様に。やったー！これで僕にネコミミの娘が出来るー！」だそうです」
あいつの飛行機、落ちたりしてくれないかな。
完全に息子の将来より自分の欲望優先じゃねえか。
「それでは私はこれで。秀行様、流菜様の事をよろしくお願い致します」
「おう、分かった。一応、一週間は頑張ってみるよ」

俺と流菜に別れの言葉を告げ、帰ろうとする紅花。
「紅花。ありがとう。あたしは秀行といっぱいイチャイチャするぞ！」
流菜さん。やっと解除できそうだった爆弾のスイッチを何で押そうとするんですかね？君は。
「秀行様……もし婚姻前に流菜様の純潔を奪う様な事があれば……その時は私が思いつく限りの残虐な手段で生かさず殺さず未来永劫ーー」
「分かったからっ！変な事しないから、もう帰れっ！」

第十三話

「さて皆様。何で俺は日曜の朝っぱらからこんな所にいるのでしょうか」
「一人で何言ってるんだ？秀行。あと、皆様って誰の事だ？」
「うるせい」
時は日曜日。ここは駅前のデパートの前。
ちなみに俺達は、先日の紅花の指示で流菜との生活に必要な物の買い出しに来ている、という訳だ。
歯ブラシや茶碗などの小物だったら近所のスーパーやホームセンターで十分なのだが、
衣類などに関してはきちんとした所で買う様に、との事だったので眠い目をこすりわざわざ駅前まで出てくる
事となった。
「そんで？紅花から何か聞いてるか？金は貰ってあるんだが」
「ん……と、これを渡せば良いと言ってた」
「おお、用意が良いな。なんて書いてあるんだ？」
流菜自身はある程度の常識が身に付いているものの、たまに致命的なミスをするので注意が必要だという事が
こいつと暮らし始めて学んだ事の一つ。しかし俺はこの時、その事をすっかり忘れていた。
流菜は実家から持って来たという小さな鞄から、もぞもぞとメモを取り出し大きな声で読み上げる。
「ひとつ、夏物の服！ひとつ、ペアのお茶碗！ひとつ、あたしのブラジャーとパンツ！」
「ぶふぉっ」
メモの内容を聞いて思わず吹く俺。そうだ、流菜以上に常識が欠落しているーーいやあいつの場合は確信犯だろう、
紅花という存在をなめていた。

開店したばかりのデパートの前は日曜という事もあって、俺たちの周りを歩いていた人が冷たい視線を投げ掛けてくるには十分な人の多さだ。
おばちゃん三人組からは「最近の若い子は……」ちっくな蔑みの視線を。
流菜の容姿に軟派な視線を向けていた男共からは怒りの視線を。
俺はとっさの判断で流菜の手首を掴み、早足でデパートの中へと急ぐ。
「にゃ！？にゃにゃにゃ！？」
いきなりスピードアップさせられた流菜は人間なのか猫なのか分からん声を出しているが、聞かなかった事にしよう。今はこの恥ずかしい視線から逃れるのが先だ。
俺たちはタイミング良く開いていたエレベーターに乗り込み、軽く息切れしながらも適当な階のボタンを押す。
「た……助かった……」
「にゃあああ……秀行……何でいきなり……」
「馬鹿たれ。あんな所で、しかも大声であんな単語を口に出すな！」
「えー、でも紅花が大声で読んであげなさいって」
「また、あいつの仕業かっ！」
どんだけトラップを仕掛けてくれれば気が済むんだ、あの女。
うわあ、しかもここエレベーターだった。ここでも周りの視線にさらされる俺。
ドアが開くと同時にエレベーターから抜け出し、とりあえずフロア案内の看板を見つけ、女の子の服を
売ってそうな場所を探す。というか、よく考えたら見つけられる訳ねえじゃねえか。
姉ちゃんや妹、もしくは彼女とかがいれば別だが、男一人じゃ女の子向けの洋服売り場なんて近づきもしない。
仕方無く俺たちはデパートのインフメーションセンターに行き、受付のお姉さんに恥をしのんで相談する。

「あのー……女の子向けの洋服を売っている店を探してるんですが」
「はい？」
うあ、変な目で見られた。いや、違うんですよ。明らかに誤解なんですよ。
「いや、連れの子の服なんですが……ええと、田舎から出てきたばかりでこういう所は初めてみたいで。
どこかお勧めの店ってありませんかね？」
おお、すごいぞ俺。よくもまあ、こんなにペラペラと嘘が出てくるもんだ。
「なるほど、ちなみにお連れの方はどのような？」
「ああ、あいつです」
そう言って俺は近くのベンチで足をぷらぷらしている流菜を指し示す。
「可愛い方ですね。彼女さんですか？」
「あ、いや、い、いとこです」
「またまたあ、そんな見え透いた嘘は言わなくていいんですよ？」
「え？いや、あの。お店は……」
なんだ、この人。さっきまでは普通だったのに、いつの間にかすげえフランクになってやがる。
「それにしても可愛いお嬢さんですね♪今日はお二人で仲良くお買い物ですかあ？こっちは日曜の朝からこんな所でヘラヘラ愛想笑いを浮かべてちくしょうあたしだって男欲しいわよなんで……」
「失礼しましたっ」
何やらお姉さんの話と顔が別次元に向かって行きそうだった俺は、近くに置いてあったパンフを手に取りダッシュで逃げる。
いったい何だってんだ。このデパート。
「おかえり！あたしの服屋さんは分かったのか？」
「うんにゃ、変な次元に取り込まれそうだったから逃げて来た。と

りあえずパンフに載ってそうな感じだから何とかなると思うぜ」
「よし！じゃあ行こう！」
「うわっ！待て！引っ張るな！」
さっき俺がした様に俺の手首を掴み走り出す流菜。
その嬉しそうでキラキラした横顔を見て俺は、こんな日曜も悪くないかなと思ってしまうのだった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「やっぱり良くねえ……」
「にゃ？」
とりあえず洋服と小物は適当な店に入り、店員のお姉さんにコーディネートを任せるだけで良かった。
ちなみに着替えた流菜はおそろしく可愛かったというのは本人には内緒にしている。
というか女の子のお客さんまで鼻血垂らしてたもんな。
しかし。しかしだ。
「下着売り場にまでは一緒に入れねえぞっ！」
「にゃんでっ！？」
「良いか、良く聞けよ。確かに漫画やアニメだったらここで一緒に入って、下着姿のクラスメイトに鼻血ブーな展開なんだろうがな。俺は現実に生きる男だ。ここで一緒に入ったら当然周りからは白い目で見られて、最悪の場合は警備員さんと事務所行きだ」
「そ……そうなのか……？」
「ああ。だから一人で買って来てくれ」
俺の鬼気迫る表情に何かを感じ取ったのだろう。流菜はごくりと喉を鳴らした後、おとなしく一人で下着売り場に

入って行った。
「さてと……ここら辺で待ってれば良いだろ」
誰とも無く呟いて適当なベンチを見つける。
しかし良く考えたら女の子とこんな風にして買い物に来るなんて初めてだよな。
しかも相手は超絶美少女だけど猫とのハーフ、そして許嫁。
どんなに信頼している友人に話しても、間違いなく白い目で見られそうな話だが、これは全て現実。
「あっれえ？秀行？」
そう。この間の抜けた、腐れ縁の男友達の声が聞こえて来たのも現実なのだ。
うわあああああああ、なんてバッドタイミング。
「どうしたの？珍しいね、こんな所で」
「いやあ、そんな事は無いと思うのだよ、裕也君。僕だってたまにはデパートに一人で来たりするのだよ。
そういう訳だから早くどこかに行ってくれ」
「いきなりご挨拶だね……」
よりによって裕也とバッティングするとは。
通っている学校の駅なんだから、確かに学校関係の奴らがいても不思議じゃない。
「良いから頼む。何も見なかった事にしてくれ、というか忘れてくれなかったら無理矢理に忘れさせる」
「その手段はすごい気になるとこだけど、かなり切羽詰まってる感じなんだね？」
「そうだ。だから頼むーー」
ちょっと待て。今、下着売り場の方からお客様ー！だの、きゃあー！だの聞こえた様な気が。
「秀行っ！どうだ？似合うか？めろめろかっ？」
「あひゃあああああああああああああああああああ」
お前、何で下着のまんま出てくるんだよ！？

羞恥心はどこいった！？
「お客様っ！お戻りください！」
「秀行はこの黄緑と白いのどっちがいい？紅花は黒が一番効果的です、って言ってたけど！」
「わかったからっ！もう戻れ！お願いします！」
半ば引きずられる様にして店内へ戻される流菜。
残されたのは息が荒い俺と目を丸くしている裕也。
「えと……なんていうか……何がどうなってこうなってるの？」
「わかった！もう全部話すよ！話せば良いんだろう、ちくしょう！」

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「なるほど。つまり流菜ちゃんは秀行が助けた猫とのハーフで、親同士が決めた許嫁で今は一緒に暮らし始めた……と」
「はいそうです裕也さんその通りでございますだからこの事は絶対に言わないで下さい」
「ずいぶんと棒読みのお願いもあったもんだね……」
あの後、店員に平謝りした俺たちは裕也に現状を話すため、フードコーナーに来ていた。
「しかし信じられない事もあったもんだね」
「だろ？大体、猫とのハーフって理解不能だろうが」
「ちがうっ！ネコミミシッポ付きの許嫁だとうっ！？しかもそれを喜びこそすれ、嫌がっているだって！？」
「そこかあっ！」
かなり別方向へベクトルを向かわせた裕也の頭をべしんっと叩く。
そうだ、こいつはこういう奴だった。
「まったく……だからお前みたいなのに知られたくなかったんだよ……」

「まあまあ、こういう事は事情を知っていて協力してくれる仲間は必要だよ？」
「って、お前……この話を信じるのか？普通は気味悪がるか、友達やめるだろ」
「じゃあ何かい？秀行が僕に話した事は嘘だったのかい？」
「いや、全部本当の事なんだけどーー」
「だったら信じるよ。秀行は僕の親友だからね。もちろん信じるし強力もするよ」
……やべえ。一瞬だけど涙が出そうになった。何でだろう？こいつが俺の周りで唯一の神に見えるぞ。
俺は心底、こいつと友達で良かったと思えた。
「時に秀行」
「お、おう。なんだよ」
妙に真面目な顔で俺を呼ぶ裕也。もしかしたら、これからの協力体制について何かあるのかもしれない。
「流菜ちゃんはネコミミとシッポだけなのかい？肉球とか出せればベストなんだが……」
「お前はあっ！何を！考えてやがったあっ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1474f/

ねこまんま

2010年10月10日03時27分発行